

平成 30 年度 文部科学省委託事業 専修学校による地域産業中核的人材養成事業

現場実践基礎力を有した保育士養成のための
「保育現場での活動」のガイドライン作成事業

成 果 報 告 書

平成 31 年 3 月

代表機関

学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校

本報告書は、文部科学省の生涯学習振興事業委託費による委託事業として、学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校が実施した平成 30 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

【巻頭言】 幾星霜を経て…

今、保育者養成が変わろうとしている。過ぎゆく時代の畝りのなかで、保育者をどのように養成するのか、どのように保育者が育っていくのか、その姿は大きく変わりつつある。

本報告書は、こうした時代状況の下で保育者養成施設が、或いは保育に携わる企業や社会福祉法人等が、新しい保育者養成を象ろうと格闘した成果を示すものである。三年という月日を閲して我々が得たものは、傍から見れば、細やかなものかもしれない。しかし、その細やかなものの中にこそ、保育者養成の未来を煌めかせるものがある。本報告書を通じて、その一端を読者諸賢に感じ取っていただけるならば、存外の喜びである。

本委託事業は、「現場実践基礎力を有した保育士養成のための『保育現場での活動』ガイドライン作成事業」と名付けられている。とすれば、当のガイドラインこそが成果なのではないか、とまずもって連想されたことであろう。ただし、本報告書にはガイドラインを盛り込んでいない。というのは、本委託事業で作成されたガイドラインは、ウェブサイト上でPDF化されたものが公開されることになっており、改めて成果報告書の一部に含める必要がなかったからである。

本報告書に盛り込まれているのは、むしろ、ガイドラインを作成するに当たって、我々が向き合った（思考と試行を繰り返した）事柄について、我々が得た知見である。敢えて一言でまとめるならば、それは〈保育者養成の分野においてデュアル教育はいかに実現し得るか〉という問いに集約される一群の問題圏への応答でもある。日本版デュアル教育は、高専などの学校種において先行的に展開されてきた。我が国の職業人を育成してきた専修学校において、このデュアル教育がいかに実現し得るのか、これが本事業を通じて我々が常に向き合っていた問いである。専修学校のなかでも保育者養成課程においては、既に保育士資格の取得に関わる「保育実習」があることもあって、我々は喧々諤々の議論を交わしている。新時代の保育者として学生が成長していく道程を鮮やかに描くこと、しかも、既存の「保育実習」とは矛盾しない形で。これが、本事業において最も困難を極めたところであろう。

専修学校におけるデュアル教育が日本の教育制度のなかで受け容れられていくのか、不透明な点がないではない。しかし、常に挑戦し続けることは重要であり、そのためにも第一歩を踏み出すべきである。願わくは、我々の試みがその The First Penguin 先駆的一步 とならんことを。

平成三十一年 啓蟄

小林 光俊

学校法人敬心学園 理事長

日本児童教育専門学校 校長

目次

【巻頭言】 幾星霜を経て	i
1. はじめに	1
(1) 本報告書の目的	1
(2) 本報告書の構成及び概要	1
(3) 付記：用語や文体の統一に関して	3
2. デュアル教育は保育者養成をどう変えるか？	4
(1) デュアル教育という教育方法と「保育実習」の関係性	4
(2) 「働きながら学ぶ」という展望	5
(3) 産学連携を一から行なう中で	5
(4) 本事業の成果と今後の課題	6
3. 学生の学びを記録する仕組み	8
(1) 当世専門学生気質：Twitter・LINE vs. 手書き文化	8
(2) 時には昔の話を：学びの痕跡	9
(3) “Step by Step”について：主として e-portfolio としての側面から	10
(4) 想定され得る反論に答える：学生の学びの視点が制限されないのか	13
4. 「保育現場での活動」の標準カリキュラム	14
(1) 標準カリキュラムの概要	14
(2) 授業を進める上での配慮点	17
5. 「保育現場での活動」をアルバイトとして行う試みの報告	19
(1) 座学と実学の往還性	19
(2) 事例報告	19
(3) 学校教育と「保育現場での活動」との繋がり	20
(4) 「保育現場での活動」が保育所にもたらすもの	21
(5) 今後の展開	21
6. 【連携校の取り組み①】「デュアル教育」の今後の可能性と「保育現場での活動」を り返って（仙台幼児保育専門学校）	22
(1) 「デュアル教育」に関わり感じたこと	22
(2) 「保育現場での活動」を通じて	22
(3) 本事業をふり返って—成果と課題—	24
7. 【連携校の取り組み②】東海こども専門学校における「自主学習」と「保育現場での 動」の考察	26
8. 【連携校の取り組み③】京都保育福祉専門学院における取り組み	28
(1) 「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わってみての感想	28
(2) 「保育現場での活動」を通じて学生がどのようなことを学んだか	28
(3) 「保育現場での活動」を通じて養成校の教職員にはどのような変化があったか ..	29

(4) 養成校にとって「保育現場での活動」はどのようにすればよりやりやすくなると思 うか	29
9. 【連携企業・法人の取り組み①】「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わっ みて（株式会社ベネッセスタイルケア）	31
(1) 到達目標レベル表の作成を通して	31
(2) 保育現場での活動への参加をさせていただいて	31
(3) デュアル教育	33
(4) 今後にむけて	33
10. 【連携企業・法人の取り組み②】株式会社チャイルド・ステージの場合	34
(1) デュアル教育という新しい保育者養成に関わってみての感想	34
(2) 保育現場での活動	34
(3) 保育現場での活動はどのような点で有益であったか	34
(4) 保育現場での活動のどのような点に課題を感じたか	34
(5) 今後こうした企業、法人と学校が連携していくことに関して思うこと	35
11. 【連携企業・法人の取り組み③】社会福祉法人どろんこ会の場合	36
(1) 「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わってみての感想	36
(2) 「保育現場での活動」を通じて学生にはどういうことを身につけてほしいか	36
(3) 「保育現場での活動」はどのような点で有益であったか	37
(4) 「保育現場での活動」のどのような点に課題を感じたか	37
(5) 今後、こうした企業・法人と学校が連携していくことに関して思うことは何か	37
12. 成果報告会報告～「保育現場での活動」で学生たちが学んだこと～	38
(1) 成果報告会概要	38
(2) 成果報告会のプログラム内容	38
(3) 成果報告会に対する学生の感想	41
(4) 成果報告会にご来場いただいた方のご感想	44
13. おわりに	46

1. はじめに

(1) 本報告書の目的

本報告書の目的は、平成 30 年度に文部科学省より委託された「現場実践基礎力を有した保育士養成のための「保育現場での活動」のガイドライン作成事業」の成果を記すことである。委託事業名からすれば、当のガイドラインが何よりの成果ということにはなろうが、本報告書にはガイドラインを盛り込んでいない。というのも、本委託事業において作成したガイドラインは PDF 化してウェブ上に公開されることとなっているからである。

そうだとすると、本報告書は、一体どのような「成果」を示すものであるのか。まずはこの点について記しておきたい。

予め結論を述べるなら、本報告書が示す「成果」とは、一言でいえば、保育者養成に関わる専修学校において、デュアル教育がいかなるインパクトを持つか、保育者養成の形がそれによっていかに変わるのか、に関しての応答である。本報告書は、当該事業に携わった、連携校、連携企業・法人から多数分担執筆をいただいでできあがっている。あらゆる視点から、多様な問題認識のもとに、デュアル教育とはいかに可能か、が語られると思っていただければよい。

(2) 本報告書の構成及び概要

本報告書全体の見通しをつけるために、構成に即して各章の概要を予め記しておく。

第 2 章「デュアル教育は保育者養成をどう変えるか」(執筆者：阿久津撰)においては、文部科学省の委託事業として三か年に亘って、その名称を変えつつも、デュアル教育の実現に関して取り組んできた様子が示される。阿久津は、保育者養成上の試金石ともいべき保育実習(保育士養成課程上に位置づく、いわゆる単位実習)と、「働きながら学ぶ」というスローガンの二点からデュアル教育がどのようなインパクトを保育者養成に与えるのかを整理している。

第 3 章「学生の学びを記録する仕組み」(執筆者：安部高太郎)においては、“今どきの学生”の特質を「出ない杭」であり続けるとともに、過剰な承認欲求を持っているという点に見ている。安部は、如上の学生の特質に基づいて、「保育現場での活動」のふり返りにおいては、学生自身がふり返る意味を見出すことの重要性を示している。

第 4 章「『保育現場での活動』の標準カリキュラム」(執筆者：鈴木八重子)においては、文部科学省委託事業においてつくったガイドライン上の「標準カリキュラム」の概要を整理した形で示している。そのうえで、鈴木は、標準カリキュラムに基づいて授業を進行していくうえでは、①保育現場にいる方からの講演、②授業手法の多様さ(ロールプレイを交えるなど)、③保育教材の製作と実演、④保育現場との情報共有の重要性、の以上四点がポイントになるとしている。

第 5 章「『保育現場での活動』をアルバイトとして行う試みの報告」(執筆者：中西和子)

においては、二年制保育士養成課程に在学する一年次学生の事例をもとに、「保育現場での活動」をアルバイトにおいて実施する可能性を探っている。「保育現場での活動」を通じて、学生は学習意欲が向上し、アルバイトに対しても、普段の学業（学校での授業）に対しても意味付けができるように変容した様子がつづられている。保育現場においても「保育現場での活動」を通じて、新入職員や実習生の受け入れを想定した、保育者の卵をいかに育てていくのかについてより具体的な検討が行われる可能性があることを示している。

第6章「【連携校の取り組み①】『デュアル教育』の今後の可能性と『保育現場での活動』をふり返って（仙台幼児保育専門学校）」（執筆者：行場裕樹）においては、東北ブロックにおいて進展している、保育現場と保育者養成施設との協働という文脈に対して、デュアル教育及び「保育現場での活動」が実際どのような意味を持つかを当時者の言葉と写真を交えて、鮮やかに描いている。学生においては、保育実習とは異なる力点で保育現場に関わることの意味が見出され、保育現場においては“Step by Step”というシステムに基づくふり返りの有効性が意見として出されている。

第7章「【連携校の取り組み②】東海こども専門学校における『自主学習』と『保育現場での活動』の考察」（執筆者：照屋健）においては、東海こども専門学校での「自主学習」のメリット・デメリットに関して現状の整理がなされ、デュアル教育に対する抱負がつづられている。子どもが好きで保育者を目指す学生もいるなかで、保育実習のリアリティ・ショックをいかに和らげ、保育現場において学びを深めようと考えられるように促すかが、大きな課題となっていきそうである。

第8章「【連携校の取り組み③】京都保育福祉専門学院における取り組み」（執筆者：野崎之暢）においては、京都における保育者養成に対する地域性を踏まえつつ、デュアル教育（賃金報酬を伴うもの）への課題と展望がつづられている。モバイル機器を用いたふり返りが、保育現場においてはなかなか受け入れがたい側面がある一方で、保育におけるICT化の進展とともに、保育現場も緩やかに変わっていく可能性を示している。重要なのは、保育者を保育者が育てていくという根源性であり、それが変わらず、引き継がれていくことが願われている。

第9章「【連携企業・法人の取り組み①】『デュアル教育』という新しい保育者養成に関わってみて（株式会社ベネッセスタイルケア）」（執筆者：佐久間貴子）は、デュアル教育に実際に携わった園長等の声も交えながら、保育現場において学生が学びを深めるためになされた工夫が垣間見られるものとなっている。ふり返りの質問項目の選定や実際の活動時間等の面においても、保育現場にいる保育者の貴重な声を伝えている。

第10章「【連携企業・法人の取り組み②】株式会社チャイルド・ステージの場合」（執筆者：鈴木佳代子）においては、三か年に亘って、当該事業に参画してきた連携企業の一つとして、それぞれの年度の変化を記すとともに、学生にとっても、保育現場の保育者たちにとってもよい機会であったことが記されている。企業側の要望に即しつつ、学校がともに情報共有をしながら学生を育てていくことの重要性がつづられている。

第 11 章「【連携企業・法人の取り組み③】社会福祉法人どろんこ会の場合」(執筆者：石堀茂雄)においては、メリーポピンズ東武練馬ルームの施設長から見た「保育現場での活動」の様子が写真を交えて記されている。学生のアンケートや評価等も保育現場に対して開示されることで、より一層具体的な対応・指導が可能になるのではないかと、その展望が述べられており、意欲的に当該事業に参画いただいたことを窺わせるものとなっている。

第 12 章「成果報告会報告～『保育現場での活動』で学生たちが学んだこと～」(執筆者：芝井華子)においては、2018 年 12 月 20 日に日本児童教育専門学校において行われた、当該事業の成果報告会の模様を、写真を交えて伝えている。来訪者及び学生へのアンケートの結果も併せて載せられており、当該事業においてはどのような成果及び課題があるのかを一瞥するうえでも有益であろう。

(3) 付記：用語や文体の統一に関して

最後に、前書きを締めくくるに当たって、本報告書での用語や文体の統一に関して、一言付記しておきたい。本報告書は、実質的に各章の執筆者の裁量によって書かれており、一書としての用語の統一や文体の統一をそもそも企図していない。それは、端的に言えば、各執筆者の色合いを尊重したためである。文体に関しては、所謂、「である調」ではなく、「ですます調」だからこそ表現しやすいと執筆者が思うことはあるであろうし、そのほうが書きやすいということがあるならば、この際、書物としての文体の統一は二の次にしようと考えた。

用語についても同様の理由で統一をしなかった。例えば、「保育現場での活動」を「プレ実習」とするか、「保育現場を体験する活動」とするか、執筆者個々の立場があり得る。そうしたなかで用語を統一することは却って混乱を招くだけであろう。

したがって、あくまでも各章において、用語や文体が統一されていれば、それでよしとしている。読者諸賢からは、本報告書の一書としての統一感の無さを訝しまれるかもしれないが、上述の事情に鑑みて、ご海容願いたい。

安部 高太朗

日本児童教育専門学校 専任講師

2. デュアル教育は保育者養成をどう変えるか？

(1) デュアル教育という教育方法と「保育実習」の関係性

本事業は平成 27 年度に専修学校版デュアル教育推進事業として始まったが、まずなぜ保育分野の専修学校として、この事業への参画を考えたかということを説明してみたい。

保育士を養成する専修学校に働く教員として 20 年以上保育者養成にあたってきて、自身の課題として長らくあったのは、「もっと『保育実習』を意味のあるものにできないか」ということであった。学生を資格取得のための「保育実習」に送りだすための準備を学校の講義内で行うわけだが、保育現場という子どもをはぐくむ現場は、さまざまな人の感情や行動が行き来する場であり、そこで働く人の保育観、福祉観も多様である。そのような現場に学生を送り出し、そこで学生自身が学んだ実感と自信を持ち学校に戻ってきて更なる成長をはかる環境をどう作るのか。これはやはり養成校だけで行うことは難しく、現場で働く保育者の方たちと共同作業でこそ成し得ることであろうという、確信のようなものは持ち続けていたのだが、どのように実現できるのかというと、なかなか具体化しなかった。

そんな折、デュアル教育という教育方法を知ったわけである。

デュアルというのは「二つ」を意味する言葉である。つまり学校における学習と、企業・団体等の現場における実践の二つの連携により学生がより実践的な学びを得ることが出来る仕組みである。両者が連携することで学生は現場でしか得られない知識や技術を獲得し、高い教育的効果を上げることができ、他方、企業・団体等も自分たちが求める人材の育成に関わることで、人材の確保だけでなく就労意欲の高い人材と出会うことも可能となる訳である。この教育方法を知ったとき、まず私の頭の中に思い浮かんだのが、本校で実施している、「保育実習」に行くための準備として行なっている、学生の保育所見学であった。

昨今、社会体験や生活体験の乏しさ、もしくは他者からの評価や視線を敏感に受け止める若者の特性からか、「保育実習」という場に置かれるプレッシャーは学生にとってとてつもない不安を与えている。加えて「保育実習」では「実習記録」をしっかり記述しなければならない。新しい人間関係に置かれたストレスと、「実習記録」の負担を苦にして途中で実習をリタイアするものも増えている。このような状況を打開しようと多くの保育士養成校では実習の前に現場を見る体験を、学校での学びに取り入れている。

本校もその流れで、公立保育所や近隣の認証保育所などの見学・観察を行い、簡単な記録をつけることを事前準備として行なっていた。しかしそれ以上のこと（例えば子どもと少しずつ関わるなど）を忙しい保育現場の方にお問い合わせすることは負担が大きいように見え、また何を「観る」のかという視点はまだ学びが浅い学生にとっては難しく、このような準備だけでは「保育実習」の不安を大きく取り除くことにはならなかった。

一方で、高校までの比較的緩やかな学習経験から急に専門的な知識や技術の習得を求め

られる中で、残念なことではあるが、「保育は大変」「保育は向いていない」と進路変更を考える学生も少なからずいた。初年次の座学での勉強の段階で、保育の魅力や価値を実感する前に保育を諦めることがないようにする仕組み作りに、このデュアル教育は活用できないかと考えたのである。

(2)「働きながら学ぶ」という展望

もう一つデュアル教育と結びつくキーワードが「働きながら学ぶ」である。ドイツなどデュアル教育という教育方法の成熟が見られる国では、学生は現場での実践活動は教育活動とみなされるだけでなく、一定の労働としてみなされ、活動に賃金報酬が支払われるという。端的に言えば、現場での実践活動は単位となるだけでなく賃金にもなるということである。もちろんその実践が教育活動としてみなされるためには、達成されるべき教育目標と学習結果、それを評価する評価軸がある。つまり現場でより効果的な実践を通した指導が行われ、学生にも深い学習結果を生みながら、現場でも一定の労働力として期待されることが可能なのである。

本校は昼間部と夜間主コースという学科編成で展開している学校であるが、昼間部の学生、夕方・夜から始まる学科の学生双方とも、学校のない時間に保育所などの現場でアルバイトをしながら通ってきているものが多数いる。「学び直し」として、一度社会に出たものの、改めて保育を学びたいという学生も一定数いる。そして経済的に困難な状況を抱えようやく学校生活を送っているものも目立っている現実がある。このような学生にとっても、現場と学校が深く結びつき、現場での活動が評価を受けることができたなら、自身の実践力が生かせることでさらに前向きに学ぶことも想定された。

(3) 産学連携を一から行なう中で

以上のような動機を持って、学校と法人・企業が一緒になって学生が育つための環境をつくるために、必要な概念やカリキュラム、そしてそれを動かす仕組みや教育支援ツールの作成を積み上げていった。

まずは保育現場に学生を受け入れていただく、この「保育現場での活動」を実施する（資格取得の「保育実習」ではないのにもかかわらず）ことの理解をどう得るかであった。今回この事業に参画してくださった法人・企業の方々は、もともとは卒業生の就職先であったり、本校講師が外部講師として携わっていたり、夜間部の学生が多数アルバイトをしているなどで、そもそも御縁があるところで、今後ますますつながりを深めていこうとしている矢先でもあった。どの法人・企業にも共通していたのが、保育業界への危機感と、それに対して前向きに取り組もうとする姿勢であった。今回参画をお願いしたところは、株式会社として保育事業を行っている企業が多かったが、その理由の一つとして、このような事業の窓口となる部門もあり、なおかつ管理者の方の理解を得られれば、各園で動いて下さるという安心感からお願いをした次第である。40人近い学生の受け入れをしていただ

くためには、多くの園を運営している法人・企業にお願いすることが、最初の一步を踏み出すには適切だと判断したのである。

まず本事業の一年目は法人・企業と学校で「どのような力が保育の現場では求められているのか」について徹底的に話し合うところから始めた。議論で明らかになった一つは、学校と法人・企業の学生に対する視点、姿勢の違いである。学校はいわば入学したての学生の姿からその視点を定めているので、何とか入学時から成長していく姿の伸びしろを見ようとする。また学生自身の動機付けも学習を進める上で大事なポイントなので、その点も大事にする。しかし法人・企業はいわば学校を出た後、出口の学生の姿から視点を定める。またその姿は社会人として、職業人として適切なものとなっていることが最大のポイントである。現在学校に在籍している学生をともに育てる中で、その視点の違いにどう折り合いをつけ、着地点を見出すのが、この事業の重要な作業となった。

保育現場で求められる力を議論した結果として、「現場実践基礎力」として四つの視点を定め、「～できる」という行動レベルで定義を確定させることができた。そして「現場実践基礎力」の四つの力を大項目に置いた評価表である「到達目標レベル表」を策定していった。

二年目は学校と法人・企業で考えたこの学習システムを実際に学生に実践してもらう年となった。やはり実際に行なってみると、プラン通りいかないことも多々あった。事前学習のあり方、保育所での学生自身が学ぶことの明確化、学生自身の不安を取り除くための配慮など、計画時に想定が甘く、整わないまままで実施してしまったところも散見された。そして一番工夫を迫られたのが、学生が「保育現場での活動」が終わった後、保育現場ですぐに指導者で行うふり返りの難しさであった。評価表「到達目標レベル表」だけでは、その日の行動や学びの結果をうまく省察できないという事態に、さらに新たな教育支援ツールの開発が必要となった。

これらの失敗を踏まえた上での改訂、新しい教育支援ツールとしてのふり返りシステムの構築や事前・事後学習の組み立て直し、さまざまな科目が連携し「保育現場での活動」に学びをつなげる試みについては、次章以降で詳しく述べていくので説明を省くが、やはり学生が学びの主体となるために必要なことをもう一度丁寧に洗い出し、組み立てる作業を二年目、そして三年目の「保育現場での活動」でも行なっていたと言える。

（４）本事業の成果と今後の課題

本事業は三年間にわたって行ってきたわけであるが、最大の成果と言えるのはやはり、学校と法人・団体が一緒になってともに学生を育てる土台作りができたということである。産学連携と一口に行っても、実際何から始めればいいのか、そして強い動機づけを持ってその連携を継続させるためにはどうすればいいのか、という問いが常にあったのだが、そこに一つの答えが見えた気がする。つまりは保育業界の抱える人材不足や質低下など、学校も法人・企業もともに抱えている問題意識を、学生に向き合い真摯に育てることを双方

が協力して実践する中で、真の意味で共有したということである。ともに育てたという実感は法人・企業もそして学校も三年目の「保育現場での活動」の実証で得ることができた。そしてこの仕組みをさらに磨いていくためにも、この事業を継続していく必要があるだろう。

また今後の課題であるが、一つはこの「保育現場での活動」をどのように「保育実習」につなげていくかという点にある。「保育実習」において学校と法人・企業が連携することが求められていることは、2019年度より実施される新しい保育士養成課程の実習のあり方の指針を読んでも明らかである。学生が「保育現場での活動」と「保育実習」のつながりを感じながら学ぶことができるようにしていかなければならない。

もう一つの課題は賃金報酬をどう実現するかということである。賃金報酬が発生するという点は、デュアル教育のもっとも大きな特性であるが、残念ながらこの点について本事業の実証の中で十分に行なうことは出来なかった。一つの試みとして、第5章にある『『保育現場での活動』をアルバイトとして行う試み』を実施した。このような企業内インターンシップ活動に対する賃金に対しての法制度が未確立（労働契約を結ばず賃金が生じる想定がない。賃金を生じさせる場合は、現状では労働基準法の最低賃金以下ではできない）なため、いますでにアルバイトとして保育現場で働いている学生にこの「保育現場での活動」を実施してもらった事例である。この実証を突破口に、賃金報酬をふまえた「保育現場での活動」を学習結果としてどう評価していくのか、そしてどう単位化していくのかなど、今後模索していきたい。

デュアル教育という教育方法を突破口として、「保育実習」ひいては保育者養成に何らかの活路を見いだせればと開始した本事業であったが、創案したカリキュラム、教育支援ツール、企業・法人と結んだ信頼や連携、そして少しずつではあるが成長した学生の姿を見て、確実に変化はあったと今感じている。

阿久津 摂

日本児童教育専門学校 副校長

3. 学生の学びを記録する仕組み

本章においては、学生の学びを記録する仕組みと題して、平成 30 年度に文部科学省より委託された、「現場実践基礎力を有した保育士養成のための『保育現場での活動』のガイドライン作成事業」において作成した、「保育現場での活動」のふり返りを記録する仕組みである“Step by Step”について記す。

“Step by Step”とは「一步一步」という意味を持つイディオムだが、まさしく学生の学びが一つ一つ積み重なり、保育者としての専門性を一步ずつ高めてほしい、という願いを込めている。

本章は、“Step by Step”の要点を記すが、その前にこうした仕組みが必要とされた文脈、すなわち、“今どきの学生”像がいかなるものかについて記すところからはじめよう。本章において提示する“今どきの学生”は、「出ない杭」であり続けながらも、同時に強い承認欲求を持つ、という特徴を持つ。彼ら・彼女らは、目立つことを嫌い、いかに目立たぬかを考えながら、その鬱屈した心情を SNS(Social Networking Service)上で吐露する。子ども以上に子どもっぽいようであり、極めて怜悧な計算に基づく空気の読み合いをしている。

保育の現場はまだまだ手書きで書類を作成したり、連絡帳を書いたり、という文化が根強く残っている。保育においても、とりわけ保育者の業務量が過重であることに鑑みて、ICT 化が不可逆的に進んでいくものと予想されるが、おそらく、それは保育における紙・手書き文化が消えてなくなるということを意味しない。こうした状況にあって、保育者として学生が学びを深めていくうえで、記録を残すということはいかなる意味を持つのか考える必要がある。

上述の ICT 化とも関連するが、既に、大学等の高等教育においては、学生の学修に関しては e-portfolio と総称される、一連のシステム上で処理されるようになっていく。保育者養成においても今後はこうしたシステム上での簡易な学習成果の確認等をしていくことが予想される。“Step by Step”はこうした高等教育上の ICT 化とも軌を一にするものである。

(1) 当世専門学生気質：Twitter・LINE vs. 手書き文化

“Step by Step”の特質について論じる前に、そもそもの前提、“今どきの学生”像を私なりに整理しておきたい。

● SNS で吐露する心情／心情を偽る学校空間

Twitter で何気ない日常を呟き、誰にも言えない気持ちを誰かに聞いてもらうかのように心情を吐露する。こうした SNS における活動は、少なくとも「さとり世代」と呼ばれる、1990 年代中葉以降に幼少期を送った人々にとって、それなりに重要なコミュニケーションの様態を生み出したように思われる。インスタ(Instagram)に映える写真をアップし、盛んに SNS 上で自己を開示し、「既読無視」の恐怖を抱えながら LINE で即時的なコミュニケ

ーションをとる“今どきの学生”は、傷つくことを過度に恐れ慄いているように思われる。それは恰も、SNS 上で「本当の自分」を確保しつつ、日々の実生活においては、例えば、「〇〇クラスの間層の一人」という与えられた役割に馴染むよう、あまり目立たないように仮面を被って、与えられた役割を演じているようでもある。

SNS 上で盛んに「本当の自分」を発信する一方で、他方、学校空間においては極めて淡々と日々与えられた役割を演じることに徹する。このような特質があるように思われる。教室において、彼ら・彼女らは自らの能力や技能を披瀝しない「出ない杭」であり続けようとする。多くの個人と軋轢が生じないようにライトな関係性をつくることには長けているように思われるが、彼ら・彼女らにとって、こうしたライトな関係性から一歩踏み込むことは大変ヘヴィなできごと（「しんどい」・「だりい」こと）なのであろう。

● 保育の手書き文化で求められる文章と SNS での文章

上述のような、特質を持つ“今どきの学生”にとって、文章を書く、ということは、SNS 上の盛んさに比して、極めて苦手なことのようである。というのも、当たり前といえば当たり前なのだが、彼らが SNS でつくる「文章」というのは、基本的に、短文の「呟き」でしかないからである。何かを読者に読み取らせることを意図している文章というよりかは、短い「呟き」にどのような反応がくるのかが重視されているだけである。

他方で、保育の手書き文化において求められるのは、なかなか高度な文章能力である。例えば、保育中の限られた時間で、子どもの様子や伝達事項を記す連絡帳などはその典型であろう。そこで求められるのは、保護者がわっと驚くような「呟き」ではなく、精確で状況把握に適した報告・伝達を企図した文章だからである。

したがって、保育の ICT 化を前にして我々が気を配るべきなのは、ハード面で学生にすり寄ることというよりかは、ICT 化以降も重視されるであろう、伝達・報告に長けた文章のうまい作り方を習得すべきだ、ということになりそうである。

ただし、前項において示したような「出ない杭」であり続ける彼ら・彼女らにとって、こうした文章は日常的に必要なものではない。容易に拒否反応が出てきてしまう。まるで、「自分は文章アレルギーだ」と云わんばかりである。

（2）時には昔の話を：学びの痕跡

上記に関連して、学生の学びをいかに蓄積させるか、という話題に転じたい。というのも、基本的に今も昔も学生は授業中にノートを作成し、そこに自分が学んだことを記するというやり方が一般的だからである。

おそらく、これだけ ICT 機器が発達した現代日本にあっても、ノートに記すということの意義は、世間一般が思うほどには減じていないのではあるまいか。それは自分自身が学んだことを記録する術が言語を介するからであり、それを容易に行える代表的なメディアが学習したことを記すノートだからであろう。

そうすると、やはりノートをつくらせようとなるのに違いないが、ここにもやはり問題がある。

多くの“今どきの学生”にとってノートをつくるというのは、教員が授業中に板書したことを写すということを意味するだけだからだ。そもそも小学校においてすら、誰もまともなメモの取り方を教わらないであろう。教員も、キレイなノート作成を意識して板書することのほうが多く、基本的に授業内容の理解と学習の定着については、学生の自助努力に拠っている。

教員の板書を写したキレイなノートは、確かに記憶を呼び起こすには丁度よいのかもしれない。それは「学びのアルバム」のようなものである。毎日見返すものではないが、時折、思い出したくなったりときにパラパラとめくって「ああこんなことを習ったな」「こういうことを勉強したのか」と懐かしむことには向いている。

これに対して、実際に学生が自分なりに整理しながらつくるノートは「学びの地図」とでもいうべきものである。多くの人にとって、地図は懐かしむものではない。実用性がなければ無意味である。ただ、この「学びの地図」は作り手が第三者に見せるためのものではなく、これまで何を学んだかを作り手自身が一瞥したときにわかるようになっていればそれでよいという代物である。

今日的に見て、多くの学生にとってノートをつくるというのは、基本的に既に教員によって整理された板書を写すことを意味している。自分なりに物事を整理したり、考えたことを書き留めたり、といったことを企図してノートに記すことのほうが圧倒的に少ない。

したがって、保育における手書き文化に馴染ませることを企図して、単に学生に「(Twitter等で「呟く」ときのように身構えずに)いつものように書いてごらん」というのは全く以て不可能かつ無意味なアドバイスになる。彼ら・彼女らにとってまずもって必要なのは、書くことでも決して「呟く」ことでもない。それ以前の、自分なりに物事を整理する経験が圧倒的に不足しているのである。

(3) “Step by Step”について：主として e-portfolio としての側面から

上述の通りの特徴を有する“今どきの学生”に対して「保育現場での活動」を行う上で我々が留意したのは、いかに意味のあるふり返りをするか、ということであった。前記のノート・テーキングの技術を身に付けるのは個人差もあり、かつ、時間もかかる。保育実習の頃までには力をつけておいてもらいたいものだが、それも厳しいというくらいの学生は少なくないであろう。したがって、ノートの形式やふり返りの仕方そのものを抜本的に変える方向で考えていくこととなった。

● 意味のあるふり返りとはいかなるものか

ふり返りにおいて“今どきの学生”に感想を求めるのは野暮である。彼ら・彼女らは空気を読んで「楽しかった」とだけ云って済ませようとするであろう。そもそも感想を聞いた

ところで何もふり返ったことにはならない。ふり返るためには、具体的で、かつ、答えることが容易な問いがなければならない。

例えば、「3歳児クラスに入ってみて印象に残ったことは？」と訊かれるのと、「3歳児クラスの子どもが遊んでいたおもちゃってどんなものが多かった？」と訊かれるのでは、全く想起することが異なるであろう。その具体性にも雲泥の差があるはずだ。

保育という営みは紋切り型で子どもに対応していればよいわけではない。時々刻々と変わる子どもの様子・子ども同士の関係性等々を見極めつつ、適切な距離を保ちながら関わる保育者が介在した保育環境の中で子どもは遊びを通して学ぶ。だからこそ、保育者はこうした子どもの様子の変化に敏感でなければなるまい。そのためには、物事を漫然とではなく、かなり具体的に観ることも必要である。その工夫が、上記の具体的な問いである。

これをふり返りに応用しようというのが、“Step by Step”の目論見であった。

● システム上の工夫：即時的に問いに答える／問いを通じて考える

“Step by Step”の工夫は、上記の意味あるふり返りを実現させるように、ふり返りの時間に使えるものとするためのものであった。一言でそれを表現するなら、〈学生とそれを指導する保育者が共通の問いに対して答える〉というものである。基本構造を下に示そう。

表 3-1：“Step by Step”質問項目のサンプル

質問項目	学生	質問項目	現場活動担当者
わからないこと・判断に迷うことをそのままにせず、質問することができた。	☒ Yes ・ No	学生は一つ以上質問をしていた。	☒ Yes ・ No
依頼された業務が終わった後に「ほかに何かできることはありますか」と言えた。	☒ Yes ・ No	学生は依頼した業務だけをやるのではなく、自分からできることを探そうとしていた。	☒ Yes ・ No
相手が質問してもいい状況かを考えたうえで話しかけることができた。	☒ Yes ・ No	学生が保育者に対して質問をするタイミングは適切なものであった。	Yes ・ ☒ No
言われたことを忘れないように、メモを取ったり、復唱したりなどの工夫をした。	Yes ・ ☒ No	保育者が教えたことを忘れないような努力（メモを取る・復唱する等）を学生はしていた。	Yes ・ ☒ No
今日の活動を振り返って（現場の保育士の方にいただいたコメントなどを記そう）			

ふり返り時には、“Step by Step”を使う。“Step by Step”上ではまずは学生が表 3-1 の一番左の列にある四つの質問に〈Yes・No〉の二択で答えていく。学生が答え終わると、画面が変わり、今度は「保育現場での活動」担当者（以下、現場活動担当者）が答える番になる。そのときに表示されるのは、表 3-1 の左から三つ目の列に表示されている四つの質問である。既にお気づきと思われるが、これらの質問は学生が答えるものと現場活動担当者が答えるものとそれぞれの視点を共有している。これらを使ったふり返りでは、〈Yes・No〉と答えることそのものに意味があるわけではない。むしろ、そのあとが重要である。

“Step by Step”上には表 3-1 のように、両者の答えが一覧で見られる画面が用意されていて、それに基づいて具体的にふり返ることができる。例えば、表 3-1 に示すように、学生は「相手が質問してもいい状況かを考えたうえで話しかけることができた。」に対して〈Yes〉で答えたのに対し、これに対応する「学生が保育者に対して質問をするタイミングは適切なものであった。」に現場活動担当者が〈No〉と答えたでしょう。

例えば、学生としては現場活動担当者の A 保育士に話しかけようとしたが、B 保育士と話している最中だったので終わった直後に話しかけたので、邪魔にはなっていなかったはずだと考えているでしょう。これに対して、当の A 保育士は、荷物を運びながらずっと B 保育士と子どもの様子の報告を聞いており、やっと下せるぞというタイミングで学生に話されたことを問題に思っているでしょう。

一般的なふり返りで考えられるのは、仮にこの件に関して何かコメントがあったとしても、「質問はいいのだけど、タイミングをよく見てね」と保育士から学生が言われて終わりではないだろうか。

“Step by Step”でのふり返りでは、まず共通の視点でなされる質問に対して答えが割れたところを中心にふり返ることにしている。その際、なぜ〈Yes〉と思ったのか、あるいはなぜ〈No〉と思ったのか、それぞれの判断基準を明示し合うことを重視している。

ここにおいて、やっと学生は自分なりに気を配ったことを現場活動担当者に伝えることができるし、現場活動担当者も学生が考えなしに話しかけてきたわけではなかったことがわかる。そのうえで、今度は具体的にどうすればいいのか、がやっと話せるはずである。ここまでくれば、“今どきの学生”にとっても自分のことを受け止めてもらいつつ、きちんと指導をしてもらったという実感が得られるであろう。

● “Step by Step”を e-portfolio として活用する可能性

“Step by Step”がねらったのは、こうした意味のあるふり返りであって、単なる保育の ICT 化ではない。例えば、連絡帳をアプリケーションソフトで作成して、タブレット端末から共有するというような保育の ICT 化はユーザー・フレンドリーな操作性にすぐれた機器が開発されれば、すぐにでもできるであろう。ただ、それは過剰な事務作業量を減らすことにはつながらない。むしろ、やっていることを紙に書くか、機器で残すかの違いに過ぎな

い。こういう部分的な ICT 化では却って保育現場が混乱することが予想される。

“Step by Step”は、根本的にこれまでの保育現場における学び・ふり返りを変えようとしたものである。ついでに ICT 化を見越したに過ぎない。ただ、これはここ 10 数年で一気に全国の大学等の高等教育機関においては進展してきた、e-portfolio の流れに棹差すものにもなるであろう。保育士養成施設のなかでも専修学校においては、こうした e-portfolio が必ずしもうまく導入されていないところもないではない。これには先に記した、紙でやっていることを単に機械化しただけではないか、という思い込みもあるのかもしれない。

いずれにしても、これからは保育士養成施設の専修学校においても e-portfolio を活用して学修を管理していく流れは不可逆的であろう。そのなかにあって、保育実習や保育現場に行った学びの成果をうまく記録に残していくことは重要な課題のはずである。“Step by Step”という仕組みはその点でも、即時的に結果が見られるようにしており、かつ、いつでも通信環境さえあれば、ふり返った内容をコメント機能で残せるようにしている。その意味では、e-portfolio との整合性や親和性というのがシステム開発上の今後の課題となるのかもしれない。

(4) 想定され得る反論に答える：学生の学びの視点が制限されないのか

本章の締めくくりとして、最後に、上記の質問に即してふり返りをするという“Step by Step”には、学生の学びの視点が制限されないか、という質問・反論が投げかけられることがあるので、それに答えておく。

ごく簡単に答えるなら、本章冒頭で整理したような“今どきの学生”像からすると、少なくとも自由にやったほうが却って学生はふり返ることに不自由になるのではないか、というのが私の回答である。仮に現場活動担当者が「思ったことを自由に話してくれていいのよ」と云ったところで、学生からすれば何を感想として述べるのが求められるのかを慎重に選び取ろうとするだけであろう（本当に思いあたった、とんでもないことを云ってしまう学生も少なからずいるのかもしれないが）。結局、何か疑問に思うようなことがあったとしても別の当たり障りのない話題に関して話してごまかすか、「とっても勉強になりました」という空虚な言葉を笑顔で云うか、その程度のことがなされるだけである。

そんなことは学生に何も残しはしない。それよりかは多少の制限があることは承知で、しかし、制限があるからこそ集中して、具体的に、かつ、省察的にふり返りを行ったほうがましなのではないか、と思われる。無論、現状の“Step by Step”等で使われている質問項目にも不備はある。こうした不備をひとつひとつ丁寧に改訂していくことが今後の課題となるであろう。

安部 高太朗

日本児童教育専門学校 専任講師

4. 「保育現場での活動」の標準カリキュラム

(1) 標準カリキュラムの概要

● 事前学習

①授業オリエンテーション
・ 授業ルールを明確にする。遅刻欠席については授業前に連絡を入れる。提出期限は厳守する等資格取得のための実習につながる態度を知り、意識できるようにする。 ・ DVD「保育所の一日」を見て保育所の様子や保育士の仕事内容を知る。
②現場の方の講演（１）、③現場の方の講演（２）
・ 保育現場の園長先生から保育所の理念や特色ついての話を聞く。 ・ 保育者としてふさわしい服装と身だしなみとその理由について聞く。 ・ 講演後は学生が記入した感想文を企業、法人毎にまとめて渡し学生の感想を共有する。
④現場に入るにあたっての準備（１）：一般的なマナー・身だしなみ
⑤現場に入るにあたっての準備（２）：服装・事前準備物の確認
・ グループワーク。（子どもの気持ちの理解やかかわり方、保育士としてふさわしい服装や身だしなみ）①食事場面の子どもの関わり②相手に伝わる挨拶の仕方③保育現場にふさわしい服装や身だしなみ④すてきな保育士とは、などを話し合い、話し合った内容をグループごとに発表し全体で共有する。 ・ 保育現場の活動園は学生が選択する。学校が配当するよりも学生自身が自分で選択したということが能動性につながる。また、配置は二人で行くことを基本とする。配慮が必要な学生についてはあらかじめ送り出す保育所に対して丁寧な説明と、学生情報を共有する。必要に応じて学生の保育の現場活動での様子を把握し、現場の先生と共有し今後の指導の在り方を考えるために訪問指導を行う。 ・ 細菌検査やオリエンテーション等必要な手続きについて説明する。子どもの健康を守るために細菌検査の必要性を知る。また、保育の現場活動において準備する物や服装を確認する。 ・ 保育教材（自己紹介スケッチブック、折り紙など）の製作。保育教材を通して子どもと関われるように演じ方も行う。また、子どもと関わるきっかけになるように絵本の読み聞かせや現場でよくされる手遊びを練習、実演発表する。 ・ 自分自身と子どもへの健康への意識を高められるように、手の洗い方、うがいの仕方を説明、実習をする。 ・ おむつの換え方、抱き方などベビー人形を用いて実習する。乳児の体のつくりや抱き方を学び、実際に関わる時の配慮点を知る。その際に二人一組で行い、互いに実演している姿を見合い、感想を相手に渡して自分の行動をふり返れるようにする。 ・ 「保育現場での活動」についての意義を知る。資格取得のための実習との違いと共通

箇所の確認。初年次で現場に出ることと学校の授業の関連性を知り、保育の現場活動を普段の学校の授業を別々に捉えるのではなくつなげて捉えられるようにする。

- ・DVD「保育所の環境について」を見て保育所の環境構成を理解する。子どもが自ら関わり遊びたくなるような環境の工夫、例えば遊具や素材がどのように配置されているのかを知る。また、子どもが自分のロッカーや食事を食べる椅子などわかりやすくマークや名前、写真をはり工夫されている点、片づけがしやすいように何をどこにしまえばよいのかが分かりやすく表示されていたり、遊具の種類ごとに分けられたりしているところに気付けるようにDVDに解説を加えていく。学生が環境構成について気づいたことを記入できるようにプリントを用意し、記入し、提出する。学生の理解の状況を把握し、学生の理解が十分ではない時にはプリントを返却する際に復習する。
- ・保育士としてのふさわしいふるまいや服装、マナーを教員が実演しながら再確認する。教員がふさわしくないあぐらや、頬杖、足を大きく広げるなどの姿、声を出さず顔だけ下げる挨拶や、呼ばれても返事をしないで顔だけ相手に向ける、学生言葉を使用して話す、などを実演することで普段何気なくしていることや使用している言葉が他者からどのように映るのか感じるのかを実感できるようにする。子どもの前でふさわしくない振る舞いや言葉遣いをすることで子どもにどのような影響を与えるのか「人的環境としての保育者」を意識できるようにする。
- ・ロールプレイ。（子どもの気持ちを理解し、関わり方を考える）①2歳砂遊びの場面②5歳積み木遊びの場面等。ナレーター役、子ども役、保育士役に分かれて場면을演じて子どもの気持ちを理解し、保育士としてのふさわしいかかわり方を知る。
- ・活動後のふり返りに使用するシステムとふり返りシートの記入の仕方の説明。
- ・最後の活動日に子どもに渡せるように、手作りカードの制作をする。子どもがもらってうれしいと思えるように子どもの生活に身近なものを入れる。また、文字は読めないで文字は少なくし、丁寧に作るようにする。渡すときには活動当日に朝にカードの実物を入らせていただくクラス担任の先生に見せて、活動中にカードを渡す時間を設けてもらえないかを願う。保育の流れの中でカードを子どもに直接渡す時間が取れない時には、先生に渡す。
- ・手遊びと読み聞かせの練習。（保育現場で子どもたちの前で実演するために）

● 活動中のふり返り指導

⑥保育現場での活動オリエンテーション（見学）
・講義の内容を参考に実際に保育所を見学することで理解を深める。見学の視点として保育所内の環境構成を学生が理解できるように事前に各法人、企業に依頼をする。学生にも環境構成を重点的に見てくるように指導する。
⑦オリエンテーションを受けて現場に入るにあたっての準備（3）
⑧⑨回目は保育の現場活動に行く
⑩第二回目までのふり返り

⑪⑫回目は「保育現場での活動」に行く。
⑬第四回目までの振り返り
・現場での振り返りをもとに個別に面談を行う。 ・各活動に対して①子どもについて気付いたこと②保育士について気付いたこと③園内の環境について気付いたこと④子ども同士のやりとりまたは、子どもと保育士とのやりとりで一番印象に残ったこと⑤その他、の項目で感想を記入する。

● 事後学習

⑭学習成果のまとめ
・グループ発表(1)(学生間での共有をはかり、活動中に学んだことを定着させる)模造紙に①園内の環境構成図②園の特色③授業連携④印象に残ったことをまとめ発表する。①はいただいたパンフレットや自分のメモを元に環境構成図を記入する。②は園のパンフレットや園の先生から聞いたことや活動中に気付いたことをまとめる。③はあらかじめ連携科目の授業内容をいくつか挙げておき、学生が現場活動とつなげやすいようにする。④についてはなかなか文章にしにくい学生に対しては教員が話を聞き取りながら、学生の思いを汲み取り文章にする手助けをする。 ・保育所にお礼状を記入し郵送する。その際に封筒や便箋、切手の購入は学生が準備し本実習の時のお礼状につながるようにする。手紙を書くことに慣れていない学生も多いので、学生の思いを汲み取りながら、手紙にふさわしい文章にしたり、敬語に直したりしてお礼状に即した文章表現を指導する。
⑮学習成果報告会
・グループ発表(2)模造紙に①後輩に伝えたいこと②Step by Step に関して目標の立て方と振り返りについて③保育の現場活動から記憶に残った場面をエピソード記録に起こし、そこから学んだことを発表する。①については自分たちの経験から来年初めて保育の現場に出る1年生に対して先輩としてどのようなことを伝えたいか、これを知っておけばよかった、やっておけばよかったと思うことを具体的に記入するように伝える。②については今までの振り返りをもとに改めて文章起こしていく。③エピソード記録の書き方の見本をもとに説明していく。その場にいない人が文章をみてその時の状況が分かるように記入することを意識できるようにする。そこから学んだことを考察として文章にまとめる。

※活動中も2回ごとに学校での振り返りを入れ、充実した活動になるようにする。

● 学生の評価

事前学習、事後学習において作成した制作物・感想文・書類等の提出状況。発表への取り組み、授業と保育の現場活動への出席などを考慮し単位認定の条件とする。保育の現場活動先からの評価はなし。活動後の振り返りシートや後期 Step by Step での振り返り内容を考慮する。
--

(2) 授業を進める上での配慮点

● 保育現場の方の講演（事前学習②③）

保育の現場の方に学生の状況を話しておく。新入生であり1か月前は高校生だった者が多く、高校時代の50分授業から専門学校の90分授業に慣れておらず集中力が短い状態である。その為、話だけでは学生の集中力が続かないのでパワーポイント等で画像を使用しながら園の特色や企業の理念等をお話ししていただけるように依頼する。また、現場の方は卒業学年に就職に向けての法人、企業の紹介は慣れているものの、1年生に向けてどのような内容を用意すればイメージしにくいと思われるので、事前に専門学校で簡単なパワーポイントの見本を用意するとイメージがしやすい。

● 授業方法の工夫

講義、実技・実習、グループワーク、ロールプレイ、実演など様々な方法を使う。特に、保育の現場活動に出る前は学生自身「保育所」や「子ども」への具体的なイメージがなく、講義だけではなかなか理解が深まりにくい。「ロールプレイ」をして子どもの気持ちを理解したり、保育士としての関わり方を意識したりするきっかけになる。また、学生は紙おむつを触ったこともなければ、赤ちゃんを抱っこしたこともない者も多い。ベビー人形を使い、抱き方やおむつの換え方を「実習」した時には興味をもち取り組んでいた。赤ちゃんの重さを実感したり、どのようなことに配慮しておむつを替えたり、着替えさせたりするのは講義だけではなかなか理解しにくいので実習は有効である。

● 保育教材の制作と遊び方

自己紹介スケッチブックシアターや手袋人形は制作するだけでなく併せて遊び方も実演することは学生が子どもの前で発表することにつながる。スケッチブックシアターはクラス全員が発表できるように13～14人ずつ位の3つのグループに分けた。3つのグループには教員が1人ずつ付き3グループ同時進行で1人3分の発表を行った。発表の時には、子どもが親しみを持てるように笑顔で演じる、子どもが見やすいようにスケッチブックを安定した持ち方をする、子ども役とやり取りをしあう、という指示を出した。見ていた子ども役の学生からは「絵が丁寧に塗られていて見やすい」「クイズ形式だとこたえるのが楽しかった」などの感想を記入し発表者に渡した。発表する、発表を聞く、という二役を経験することで、発表する側だけではなく見る子どもの気持ちを考えることにつながった。

● 現場との連携の仕方

学校での授業の内容やどのような保育教材を制作したか等の情報は、保育の現場活動前にできるだけ写真や題名を入れて具体的に伝え共有する。そうすることで学校と現場は学

生が理解しやすい内容や伝え方を一緒に考えるきっかけになり、学生の学びが深まる。

鈴木 八重子

日本児童教育専門学校 総合子ども学科 学科長

5. 「保育現場での活動」をアルバイトとして行う試みの報告

(1) 座学と実学の往還性

平成 30 年 9 月 15 日に行われた全国保育士養成セミナー（全国保育士養成協議会主催）において、「保育新時代における保育実習の多様性と可能性を探る」をテーマに分科会が開催された。その中で、「これまで、養成校における実習指導においては、具体的な保育の方法論および保育の記録等が中心課題となってきたが、今後はこれまで以上に保育の専門集団としての組織のあり方や、一人ひとりの保育士の役割と連携についての視点を育んでいけるような内容を含むことが重要になってくると考えられる」「養成校と実習施設が共通に認識される方針や方法や評価を基軸にし、養成校と実習施設の連携・協働という観点から保育実習の強化を考える必要がある」と述べられている。

座学と実学の往還性という観点から、保育現場と学校が共に学生を育てるデュアル教育は、保育新時代において求められる保育者養成の在り方のひとつになると考えられる。今回の実証事業は、学校側が計画をし、学生を保育現場に送り出し、現場の協働を仰ぐという形を取り、保育実習の前段階に位置して行われたが、本報告では、保育現場と保育士養成校が、連携して、学生を育てていく道筋の一つとして、保育現場で保育補助として働きながら学ぶ学生に対し、現場と養成校が「共通に認識される方針や方法や評価を基軸に」協働して学生を育てる試みを紹介したい。学生が働く保育現場に対し、学校側が関わり、保育士養成教育の課程を現場と共有し、学習目標の達成の評価を現場と学校が共に行う可能性を探る。

(2) 事例報告

事例 A 2 年制保育士養成課程 1 年次在学生

学校授業時間 月～金曜 18:20～21:30 土曜 9:00～16:10

入学時より認可保育所勤務 週 5 日 8:30～17:30

アルバイト先として保育所を選択した理由「保育士資格を取得するに当たり、前もって子どもと関わっていたかったから」

事例 B 2 年制保育士養成課程 1 年次在学生

学校授業時間 月～金曜 9:00～14:30

入学時より認可保育所勤務 週 4 日 15:30～19:00

アルバイト先として保育所を選択した理由「座学と実践を同時並行することで学びを深めたかったから」

学校側より勤務先保育所に、実証事業で使用した「Step by Step」を用いた、学生とのふり返りを依頼した。ふり返り終了後、学生にはアンケート、勤務先保育所の施設長、ふり返り担当職員にはインタビューを行った。

〔学生のアンケートより〕現在の勤務経験の範囲内で可能なふり返り項目を選択して、ふり返りを行ったことに対し、学生からは、「自分の保育をふり返ることが出来て良かった。

上司と「保育」について色々と話す機会がもてて良かった。」「1日の勤務後にふり返りを実施したため、記憶が鮮明なうちに反省をすることが出来て良かった。又、モチベーションの向上に繋がったと思う。」との感想を得た。ふり返って気付いたこととして、「日頃ふり返ることが無かったので、全体的に気付くことが出来た。」「自分の保育に対する意識、知識の無さに気が付いた。しかし、それを受け止め、さらに頑張ろうという前向きな姿勢を持つことが出来た。」ということが挙げられた。

〔施設長、担当職員のインタビューより〕ふり返りの質問項目については、ふり返るに当たって概ね適切であったとの判断を頂いた。学生と職員の回答に相違があった部分に対しては、職員がどのように受け止めているかを丁寧に説明し、学生、職員共に、まだ出来ない(No)と回答した項目に関しては、期待される方向性を伝える機会となった。質問4項目の内、1問程度は、今後の学びの目標となるような難易度のものが良い、とのご意見を頂いた。

職員側の負担の度合いに関しては、現在の勤務状況に合わせてふり返り項目が選択できたので、無理がなかったとの回答を得た。学生が自らの感想と共に、職員からのコメントも記録しており、職員は、感想、コメントの記録に目を通し、追記したいことは書き込んだので、職員側の仕事が増えるという負担感は無かったという。

(3) 学校教育と「保育現場での活動」との繋がり

事例 A、B の学生に対し、1年次に配当された授業科目の内容で、現在の保育の仕事に役立っていると思われることを挙げるよう、求めた。回答には、授業内容と現場の仕事の繋がり方に3通りの形が見られた。

①学校での学びを現場で実践

「保育表現技術・楽典」「保育表現技術・ピアノⅠ」で学んだ歌を、現場で子どもと共に歌うことができた。「保育表現技術・幼児体育Ⅰ」で体を使った子どもとの触れ合い遊びを知り、実践することができた。

②学校での学びによって現場での動きが変化

学校で学んだ知識によって、現場での自らの動きがよりよいものに変化したことが報告された。「知識を得たことにより、適切な観察の視点を知った」(「児童家庭福祉」「子どもの保健Ⅰa」)、「発達に沿った対応の方法を知った」(「保育の心理学」)ことにより、より注意深い実践が出来るようになった。事例 A、B 共に、保育補助として、0～2歳児と関わっており、「0歳の食事の離乳食の段階が理解できた」「おやつのに介助の方法や自立促進について考えながら行うようになった」(「子どもの食と栄養」)、「細かな発達のことなどが分かり、より考えながら接するようになった」(「乳児保育」)、「子ども達にどのような病気が多いか、基本的な知識を得て、健康状態の観察が出来、変化の発見が早くなった」(「子どもの保健Ⅰb」)との回答があり、学校での学びが実践を通して確かなものになっていることが示されている。

③学校の学びによって現場での態度が変化

「保育の基本的な事を教わり、仕事が楽しくなった」(「保育原理」「保育内容総論」)、「学ぶ姿勢を持つことを意識するようになった」(「実習研究概論」)

(4)「保育現場での活動」が保育所にもたらすもの

保育所側は、アルバイト学生とふり返しを行ったことにより、学生に、もっとこのような経験をさせてあげたい、育てたい、という願いが生じたという。また、学生の迷い、戸惑い、不安を知り、このように捉えていたのか、との気付きがあったという。実習生、新任職員に対する時の参考になり、伝えなければいけないことをどのように伝えるか、考える機会になった。職場として、新任職員を受け入れるが、慣れない不安の中で、離職に繋がることも少なくない。学生時代から、保育の現場で働き学ぶ機会があれば、移行はスムーズになることが期待される。

(5) 今後の展開

今回の実証事業における「保育現場での活動」は、未経験学生の体験が中心の内容であり、事前学習としての位置づけであったと言えよう。一方、本報告のように、現場経験を積んでいる途上の学生の「保育現場での活動」には、現場を通じて、専門能力習得を目指すことが期待される。

養成カリキュラムの中で、「保育現場での活動」を通して、学生にどのようなことを身に付けて欲しいか、具体化する必要がある。実証事業で提案された「到達目標レベル表」を骨子とした教育目標を考案していきたい。

また、現場と養成校が、学習目標に対する学生の到達度を、どのように評価するかも考える必要がある。学生と現場職員、現場職員と学校側の担当者、学生と学校側の担当者のふり返し、学生の気付きの記録作成、報告発表等が評価対象になると考えられる。

アルバイトとして行う「保育現場での活動」における学習結果が評価され、単位付与されることになれば、学生は保育現場で経験を積むことに対し、より積極的になることが期待される。学校と現場の協働の在り方を、模索していきたい。

中西 和子

日本児童教育専門学校 保育福祉科 学科長

6. 【連携校の取り組み①】「デュアル教育」の今後の可能性と「保育現場での活動」をふり返って（仙台幼児保育専門学校）

（1）「デュアル教育」に関わり感じたこと

仙台圏での保育現場の現状は、全国的な傾向と同じく慢性的な保育者不足が続いている。原因として、新卒者の保育職離れや早期離職者の増加が挙げられ、その要因として労働環境（賃金・過剰労働・人間関係）が問題視されている。このような状況の中で養成校の役割も重要になってきており、その解決策として東北地区では養成校と保育園等が「協働」という視点に立ち、養成校と保育現場が手を取り合って共に将来の保育士を育てていくというスタンスのもと、意見交換を積極的に実施している。そのような中で、今回の「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わり、養成校における学習と保育現場における実践の双方向の連携により、学生が実践的な学びを得ることができる仕組みづくりに新たな可能性を感じた。また、「デュアル教育」を継続的に続け、どの地域でも実践できる汎用性を持たせるためにも、「養成校」「保育現場」「学生」が共にメリットがある制度作りが求められる。その点においても、養成校および学生は保育現場でしか得られない知識や技術を獲得することで高い教育効果をあげることができ、保育現場は人材確保や人材育成に寄与することができ互いに相乗効果をもたらす教育方法であると感じた。

（2）「保育現場での活動」を通じて

昨年度に引き続き、今年度も本校学生（1年生）が保育園において「保育現場での活動」の実践を行った。昨年の反省をふまえ、ICT化の改善やスマートフォンの使用等新たな「ふり返り」の仕方で行い、取り組み一定の成果が出たと感じている。以下はそれぞれの感想である。

<学生からの感想>

メリット（良かった点）

- ・スマートフォンを使用した「ふり返り」がとても行いやすかった。
- ・実習と違い、日誌等の記入物がなく、保育活動に集中できた。
- ・子どもとたくさん関わって楽しかった。

デメリット（要望）

- ・もっと継続的に行いたかった。（4日間のみの実施）
- ・他の保育園でも行ってみたい。



< 保育士からの感想 >

メリット（良かった点）

- ・活動のねらい（献立）が明確で、「ふり返り」が行いやすかった。
- ・「ふり返り」のコメント欄がなくなり、「ふり返り」にしっかり時間が取れた。
- ・スマートフォンを利用することで、学生ともかかわりやすくなった。
- ・保育士たちの日頃の保育活動にも刺激になり、職員の活性化が図られた。

デメリット（要望）

- ・今後も継続して実施してほしい。
- ・活動のねらい（献立）の種類を増やしてほしい。
- ・半日単位の活動時間（今回は2時間）を確保してほしい。



＜専門学校からの感想＞

メリット（良かった点）

- ・実習やボランティアとは違った保育の現場経験に、学生は多くの刺激を受けた。
- ・参加学生は活動後の学習活動にも積極的になり、保育者への意欲が強まった印象。
- ・学生を通じて、保育園との連携が図られた。

デメリット（改善点・課題・要望）

- ・全学生実施へ向けたカリキュラムや日程調整の問題。
- ・単位化や報酬を与えるまでの制度構築。
- ・協力園の拡大。
- ・事前指導、活動中の指導方法。



（3）本事業をふり返って一成果と課題一

保育業界が抱えている問題（保育士離れ・早期離職）や取り巻く環境の変化（保育の質の向上）の中で、「量と質」を向上していく必要性が求められている。そのような中、養成校と保育現場との連携により保育者を「育成」していくことが重要であると考えられる。しかし、両者の連携はなかなか進んでいないのが現状であり、保育業界における「デュアル教育」を構築し、推進・拡大していくことは大変有意義であると感じる。特に多様化する保育需要に応じた質の高い専門人材を育成する職業教育機関である専修学校の果たすべき役割は大きい。今後、「デュアル教育」事業を全国的に拡大し継続的に推進するために、3者（養成校・学生・保育現場）それぞれにメリットがある仕組みづくりの構築が必要である。年々制度の検討が図られ、よりよい「かたち」になってきているが、今後の課題として、ふり返りシステム「Step by Step」の向上・保育現場の負担軽減・授業単位および報酬の付与などがあげられる。その点を今後解決し、本校も保育業界の活性化の一助になる

よう努力していきたいと思う。

行場 裕樹

仙台幼児保育専門学校 教頭

7.【連携校の取り組み②】東海こども専門学校における「自主学習」と「保育現場での活動」の考察

近年、保育実習に行くことによって保育者になるという選択をしない学生が如実にふえています。学生にとっては子どもが大好きでこの道を選んだと思いますが、保育現場に行くことで、保育は子どもが大好きという気持ちだけでは通用しないという捉え方の変化が大きいように感じられます。そこで、保育実習に行く前に軽く実習を行い、できるだけ現場との隔たりをなくすよう、当校では自主実習を学生に行わせています。

今回は実際に「保育現場での活動」を行えませんでした。この位置づけがおそらく現在当校で行っている自主実習だと考えております。よって、学生が自主実習を行ったことで考え方がどう変わったのか、良かった点、悪かった点はどうか、学生にとってどのような位置づけで自主実習がなされているのかを整理してみました。

良かった点は、「園の雰囲気事前にわかる」、「最初は簡単だと思ったが、保育に対する難しさを身をもって実感した」、「先生方の雰囲気が事前にわかる」、「一日の流れを知ることができる」、「子供たちの様子が分かる」、「子どもに対する恐怖心が少しでもなくなる」、「子どもによって1歳の差の発達が大きいことがわかった」、「園の先生の指導方法を直接見ることができた」、「HPでは知ることができない細かな情報を知ることができた」、「自主実習で自分に足りない力や技を実習までに準備できる」、「子どもについて理解すること」、「先生方に指導を受けたことを本実習で活かしていく」、「手遊びや読める絵本を増やすことなど足りない部分を認知し実習までに準備する」、「先生方と顔合わせが終わっているの、本実習では気軽に質問できる」など授業や当校出身の学生だった社会人から直接話しを聞くなどといったこと以上に、直接体験して慣れ親しむことが学生にとって大変有意なことかが分かりました。

しかし、悪かった点も存在し「園の先生方がすごすぎてプレッシャーになった」、「自分がこの仕事をして良いのか考えてしまった」、「自分の知識や技術が足りないことに不安になった」等々、現場における先生方と自分を比較してしまい、マイナス面で捉える学生も少なからずいました。多分、これらは当校が学生に自主実習はどこまでできれば良いのかを明確に伝えないまま(伝えてしまうと、そこまで満足し、それ以上頑張らなくなる学生が居ないとも限らないため)だからだと考えられます。

上記のように学生から様々な声があがる中で、当校としても保育者養成校で教えられることは限られています。よって、今後は企業や法人等と連携を模索していますが、保育の世界は保守的な所も多く、また、地域においても考え方に差があるのでなかなか進まないのが現状です。ただ、現代社会においてそれほど多くの経験を積んでいない学生に対し、期間が短いからという我々の感覚の元、自主実習をいきなりさせてしまうことは、学生にとってもあまりに刺激が強い部分もあるかと思われます。

よって、今後は保育の流れを実際に体感する、子どもたちを観察してみる、直接こども達と関わってみるなどの流れを自主実習、もしくは「保育現場での活動」を取り入れるな

かで実践できるようカリキュラムを整え、学生自身も様々な能力を伸ばしていけるような
仕組み作りをしていきたいと考えています。

照屋 健

東海こども専門学校 副校長

8. 【連携校の取り組み③】 京都保育福祉専門学院における取り組み

(1) 「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わってみての感想

京都保育福祉専門学院としては、企画当初から質問項目の作成についてお手伝いをさせて頂いています。

保育を知らない方でも「何がどのように出来たら価値ある働きと判断出来るのか」という捉え方を明確にするために悪戦苦闘してチャート表を作っていたのがつい最近のように思い返されます。

話し込むなかでは、学生時代に限らず、働き出してから心配も湧き起こり、気づけば「感じ方」や「考え方」も混在したリストになっていました。

養成校は資格取得に向けて一定ラインの基準をもって学生指導にあたるわけですが、保育福祉現場でのボランティアや実習においては、学生の人柄に合わせた対応等、良い意味での評価基準の曖昧さで成り立っている側面があります。

そのなかで、確固たる柱を打ち立てるには、たくさんの事例を集約整理する作業の必然性も痛感させられました。

事業として期限のあるなかでひとつの結果に結びつけるためにも、最終、○か×かの簡単な一問一答式の展開は現実には合った選択であったと思います。

一方で（少なくとも京都でお世話になった）保育現場においては、私たちが当初突き詰めようとしていた「学び多く豊かな感性の保育者になるための今日」的な発想の方が強く、モバイル機器を用いた「簡易記録用紙」的なものでは、学生の本質理解に繋がらないという想いを明確に打ち出して来られる保育士もいらっしゃいました。

それでも保育現場は「(そんなに想いをもっているのであれば) 試しにやってみようか」と受けて下さる度量の深さもあり、子どもたちとの生活で培われた「何かの発見」「何かのつながり」を丁寧に拾おうとする気持ちで動いて下さる感性は会議等で他校様のご発言を伺うなかで感じる事が出来ました。

しかし、この事業の本筋である、賃金が発生する実習のような取り組みそのものについての理解には、現段階ではどうしても土地柄が色濃く反映されるように思われました。その現象は良い悪いの判断を下す要素のものではなく、人材不足の問題点の中心をどこに据えて討論しているのかの違いだとも言えます。

今回の事業を通して、少なくとも、保育の魅力をどのように発信し、どうしたら保育の仕事を選びたくなるのか、面識のない現場であっても、話しをするきっかけとして調査の機会をもらえたのは非常に有意義だったとも感じています。

(2) 「保育現場での活動」を通じて学生がどのようなことを学んだか

今期は1回生（高卒現役） 男子1＋女子1 計2名が参加しました。

2018年10月15日(月)～26日(金)の8日間のプログラムでした。

2名ともが日頃から自己評価に低く、不安が先に立つタイプなのですが、保育現場への

中間訪問では「ここに来て良かった！」「子どもと直接関わることで、学校の勉強だけではわからないことを知ることが出来た。」等とても前向きな様子にこちらが安堵した次第でした。

併せて学生は「自分は出来ていないことが多いように感じていたが、先生方はあたたかく見てくれていたことが嬉しかった。」等、感謝の言葉を口にすることも多く、人が人を育てる…保育士の卵は保育士が育てる的な想いも強く抱かされました。

今回、モバイル機器でのやりとりとしては、現場担当者の様子として、学生さんと回答傾向が違うものが出ること自体に対してとても気を遣っているような印象でした。

(3)「保育現場での活動」を通じて養成校の教職員にはどのような変化があったか

対外的なところでの説明が必要ということもあり、モバイル機器に対するアレルギーのひどいタイプが実はたくさん居ることに気づかされました。

本学では教員が「学生を保育する」想いで努めています。

「出来ない学生」ではなく、相手に合わせた言動を示すことでクリア出来るものも多いのではないかという発想です。

そのようななかで、教員は「出来ない」から「しない」のでは指導は成り立ちません。

これから保育現場にも機器系の導入は必須化されると思われますので、まずは触ってみる勇氣を持てる雰囲気づくりに努めたいと感じさせられました。

保育現場とのつながりについては、学院がこれまでに培った土壤があるので、機器を介しても違和感なくスムーズな取り組むことに努められたように思います。

(4) 養成校にとって「保育現場での活動」はどのようにすればよりやりやすくなると思うか

私が本務に着任した際、初めて実習訪問で伺った園長先生から「顔の見えないやつは帰れ」と追い返された経験があります。

びっくりする反面、どうしてそのような言動に至ったのかとても気になり、その後しつこく一方的に通うなかで、徐々に真意を教えて下さり、今ではどこよりも強く支えて下さる存在としてご指導頂く間柄となっています。

仕事とは言え、人を理解しようとする行為には時間が伴うものだと考えます。

見知らぬ人が来た時、子どもが保護者や保育者の表情を確認するのと同じで、学生も現場と養成校のつながりや対応を通して、どのように振る舞えばよいのかを学習しているのかもしれない。

今回はそのきっかけをモバイル機器の説明で入ることが出来たので、非常にスムーズだったように感じています。

今回の委託事業に同行させて頂き、いつもとは違った視点で保育現場や学生さんの様子等に触れる機会もあり、充実した3年間となりました。

日本児童教育専門学校の皆様を始め、改めまして出逢いそのものに感謝申し上げます。

これからも「保育」をまんやかに、魅力溢れる現場作りのお手伝いをさせて頂ければと思います。

たくさんの学びをありがとうございました。

野崎之暢

京都保育福祉専門学院 保育科科长

9.【連携企業・法人の取り組み①】「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わってみて（株式会社ベネッセスタイルケア）

（1）到達目標レベル表の作成を通して

私は、2017年度からこのプロジェクトに参加させていただきました。待機児童の解消がさけられる中、首都圏では特に保育園新設も進み保育士の需要が非常に高くなっています。弊社でも新卒の保育士採用数はここ数年増やしてきています。そのような状況の中で、ここ近年は現場の園長からは養成校で習得する専門性はとても大切だけど、いざ現場で実践となるとギャップがあり、まずは社会人としての振る舞いという点から伝えていかなければならないという話をよく聞くようになっていました。また、新卒で入社いただく保育士の方の中にもイメージをしていた仕事内容とギャップがあり早期の退職につながっていくという方もでてきていました。そんな時、このプロジェクトへのお声がけをいただきました。保育士になりたいと夢をもって専門学校に入学する人たちが、実習を経験することで理想と現実のギャップにぶつかり保育士をあきらめてしまうのではなく、就職先としても保育士を選択したいと考え、保育士となって勤務をはじめてからもギャップがなくよりスムーズに仕事ができるようになるために何かお役にたてるのであれば、微力ながら参画させていただきたいと思い、参加のお返事をいたしました。

専門学校の先生方、そして保育事業者、それぞれの立場で忌憚なく意見を出し合い、保育現場で“発揮してほしい力”とはどんな力なのかということをテーマに、ディスカッションをさせていただいたことは大変有意義な時間となりました。そこから生まれたひとつが「到達目標レベル表」と認識をしております。ステップの示し方や活用方法などまだまだ様々課題はあるかと思いますが、到達目標レベル表の中で示した大きな四つの視点「成長する存在である子どもに影響を与えることを自覚し、行動・発言できる」「子どもにふさわしい環境を作り出し、一緒に遊びこむことができる」「相手の気持ちを理解し受け容れようとする」「自ら考え、提案、行動ができる」を言葉にできたこと、育成する側、そして受け容れる側どちらもが、保育現場での必要な力を行動レベルで確認し合えたことは、大きな成果になったのではないかと思います。

このレベル表作成を養成校の先生方とできたことは、保育士になろうとする人たちが現場にはいった時のギャップを減らしていける一歩につながると思えたひとつであり、大変有意義な時間となりました。

（2）保育現場での活動への参加をさせていただいて

2年間、たくさんの学生さんたちに保育園にお越しいただき活動をしていただきました。活動をはじめる前に受け入れ園の園長には「今回の取り組みは実習ではなく、まずは保育現場とはどんなところなのかを知り、保育の仕事が楽しいと思っていただけるようにすること」を目的にしていることを確認しました。一人でも多く保育園の現場を知ることにより保育士になりたいと思ってもらえる学生さんを増やしていくことができればと目線あわせ

をし、活動をはじめました。

2年間の中では、うまくいくこと、なかなかうまくいかないこと様々な課題がありましたが、活動に送り出す側の先生たちが学生さんのことを親身に考え、受け入れ園の園長とも情報交換をしてくださり、受け入れ内容を変更されたり、活動前の授業内容を工夫されたりとされたことは大きく、2年目の今年度は最初に目的としていた、保育活動を通してリアルな現場を知りよりこの仕事についてみたいと思える活動ができたのではないかと感じています。日本児童教育専門学校の先生方の多大なる努力がありその努力に敬意を表したいと思います。

2年間の保育現場での活動の受け入れを通じて、たくさんの学生さんと接点をもたせていただき、改めて、実習とは別の視点で現場にはいる経験をすることは、保育士の仕事を実際に見ることができ、こどもがかわいいという視点だけではなく、保育者がどんなふうにかとこどもと関わっているのかということが見てもらえたこと、また小さなこどもの命を預かる仕事であり安全への配慮をどのようにしているのかなどを感じてもらえ、保育士をめざす学生さんにとってはとてもよい時間になったのではないかとという声が多数の園長から聞かれました。実習となると課題がかせられており、評価もあるため緊張もあり本来の保育の楽しさを実感できる学生さんもしれば、それができずに挫折をしてしまう学生さんもいらっしゃるのではないかと思います。そのことを考えると、実習前にこの保育現場での活動があることで、想像と実際の仕事のギャップを埋めることもできると思いますし、まずは保育士の仕事を楽しいと覚めることができことは必要なステップなのではないかと考えます。

また活動を進めていく中で、学生さんたちがこどもとのかかわりを楽しめるようになり、こどもたちの変化に気がついたり、発達という視点をリアルに実感したりということもでてくるようになっていくことが実感できたという声も園長から聞かれました。学校での学びが机上の学びだけではなく、仕事と結びつけて考えることができる機会にもなっていたとしたら学生さんにとっては学びがより楽しくなる機会にもつながっていくのではないかと感じました。

そして、今回の活動にあたっては、服装や髪型、挨拶といった基本的なことをしっかり事前に学生さんたちに伝えてくださったこともあり、挨拶をしっかりしてくれたことが意欲を感じることができ受け入れやすかったという声も聞かれました。どのような仕事でも基本であり意識をして行動をするということができたことはよかったのではないかと思います。

活動をふり返り、今後に向けての課題として挙げがってきた声には、もっと積極的にこどもとかかわる時間をもてるとよかったのではないかとということがありました。学生さんの状況にもより臨機応変に判断をしたほうがよいことはあると思いますが、学生さんが戸惑わないようにステップを踏むことを意識したプログラムになりすぎている感があったのではないかとということです。また、振り返りに使用をした iPad はチェックのしやすさはあるものの、質問項目がもう少し自分たちのやりたいことや、その日にやった内容を振りかえることができるものになっていてもよかったのではないかとという声がありました。

今後の取り組みの参考になれば幸いです。

(3) デュアル教育

専門的で実践的なキャリア教育・職業教育を行っていくことを目的とした“デュアル教育”は、日本でも今後もっと進んでいくのではないかと考えます。その時に重要なのは、働く人のスキルではなく、働くということの覚悟なのではないかと考えます。その覚悟をもつには、報酬（賃金）をセットで考えていくことは必要不可欠なのではないかと思いました。弊社の保育園では夏の時期に学生のアルバイトさんを雇用します。保育の勉強をしている人ばかりではありませんが、保育園での仕事を希望される学生さんがアルバイトとしてきてくれています。このアルバイトを経験することで保育士になりたいと考えてくださる学生さんも多くいらっしゃいます。その学生さんたちの様子をみていると、楽しくこどもたちと接することができており、そして仕事としての自覚もあるためこちらが依頼をすることをしっかり実践してくれます。デュアル教育を実現していくためにはいろいろと超えなければならないハードルはあると思いますが、「学びながら働く」という経験は学ぶだけではない覚悟ということもあわせて学ぶことができ、職業人としての成長をより促進させる機会になっていくのではないかと思います。

(4) 今後に向けて

今回のプロジェクトに参加をさせていただき、学校と企業がそれぞれの立場を理解する時間をいただけたことは大変貴重な時間となりました。現場での悩みはどこにあるのかということをリアルにお伝えをしていくことで学校現場での教育に生かしていただけることもあり、また学生さんの状況を教えていただけることで、受け入れ方の工夫をしていくこともできます。保育士になりたいと夢をもち専修学校にはいられた学生さんが一人でも多く実際の保育現場で生き生きと働き続けていけるように、今回の取り組みが仕組み化され、今後に生かされていくことを期待します。

最後になりましたが、今回のプロジェクトに参加させていただいたことに改めて感謝申し上げます。

佐久間 貴子

株式会社ベネッセスタイルケア

10. 【連携企業・法人の取り組み②】 株式会社チャイルド・ステージの場合

(1) デュアル教育という新しい保育者養成に関わってみての感想

まず、三ヵ年にわたり、会議に参加させて頂いた事に感謝いたします。

いろいろ考えさせられる事もあり、勉強になりました。

先生方多数参加のもと、少しずつ前に進んでいった気がいたします。

正直、あまり目的を持たない学生さんのモチベーションをいかに上げるか

まずそこからのスタートでした。保育という仕事のすばらしさ、楽しさをどうしたら分かってもらえるのか？どうしたら意欲的に学ぶことができるのか？

皆様と議論を重ねていく中で実感したことは、時代は大きく変わり学生の皆さんに根気よく丁寧な指導が大切だと思いました。

知らないことを求める前に、教育、指導が必要だと考えました。

(2) 保育現場での活動

オリエンテーションから始まり、お散歩その他の行事に参加し、保育士になる為の第一を踏み出すわけです。

そんな中で、私共の同じ園に、前期、後期、実習に入った生徒さんがいました。違う園での活動も良いのですが、長く実習に入ることによって、保育士としての仕事がより深く学べると思います。

学生さんの選択ではあるのですが、いろいろな経験をして頂きたいと思っています。中でも行事の実習は楽しく活動が出来ていたと思われれます。実習に行事を組み込んで楽しく活動出来るような配慮が園側で出来ると良いかもしれません。

(3) 保育現場での活動はどのような点で有益であったか

学生さんを受入れることによって、指導にあたる保育士も共に勉強になっていたと思います。オリエンテーションの時間を取って頂いたことで、事前のコミュニケーションが取れたことも良かったと思います。当園としても、隠すところなく、ありのままの状況を見てもらい、園の良さを分かってもらえたことが有益だったと感じます。

学生さんの考え方や、行動にいたるまで、受け入れる側でもとても勉強になったと思います。

(4) 保育現場での活動のどのような点に課題を感じたか

スタート 1 年目では園に行っても挨拶も出来ず暗い表情の生徒さんがいました。

ただ背中を押され、園に行ってきたと言われても、どうして良いのか分からずその時点で保育士になることが苦痛になったと考えます。

2 年目、3 年目と確かに変化し研修中も笑顔で保育をするようになっていました。

それは私たち企業側が事前の指導を強化して頂きたい、という願いを受け入れて頂き十

分な指導をして頂いた表れと思っています。

指導する保育者も忙しく、十分に時間が取れないことが歯がゆく感じるようです。

どこの園も保育者の配置に余裕が無い為、十分な指導が出来ているのか心配です。

(5) 今後こうした企業、法人と学校が連携していくことに関して思うこと

学生さんに対し受入れ先の私たちもきめ細かな指導をしなくてははいけません。

あたりまえの事でも家庭でも学校でも教わる事が無ければ無理な事と考えます。知らない、分からない＝不安に繋がり、その上まだまだ理解が出来ない子供たちがいます。そんな中、12月20日の学生さんの発表は、それぞれが素晴らしかったです。

やはり根気よく指導する事の大切さを実感した時間でした。

事前にアナウンスがあれば、実習受入先の園長に見せたかったと思うほど成長していました。学校、企業、現場での取組の大切さを更に感じました。

鈴木佳代子

株式会社チャイルド・ステージ

11. 【連携企業・法人の取り組み③】 社会福祉法人どろんこ会の場合

(1) 「デュアル教育」という新しい保育者養成に関わってみての感想

率直に良い取り組みだと思いました。一人で実習や見学することは不安が大きいと思うので、二人で一緒に保育園に来られるのは安心感が違うと思います。実習前の導入として「保育に関する知識や経験が少ない学生が現場を知ることを重視した取り組み」をすることで、なぜ学校で勉強するのかの意味がわかってくるとも感じました。講義で話を聞くよりも子ども達の姿を見て、関わって感じる事の方が確実に身になると改めて思いました。「百聞は一見に如かず」です。



(2) 「保育現場での活動」を通じて学生にはどういうことを身につけてほしいか

まず保育というのは「養護」及び「教育」が一体的に展開されることを指すというのを意識する事を身につけてほしいです。そのための心構えとして子どもの権利を尊重することを意識して関わる事が大切です。さらに保育者は様々な視点や引き出しをもっておくことが必要だと思っています。子ども達にとっての心の安全基地になれるように、日々どのように過ごすか、関わるかで少しずつ「信用」が貯まって「信頼」に変わってくるからです。子ども達は感覚で大人の気持ちを感じとることに優れています。一人ひとりの人格形成を担うという非常に責任とやりがいがある仕事であるとともに、大変な事もあるけど、それ以上に楽しい仕事であると思ってもらえるような意識づけも出来たら幸いです。



(3)「保育現場での活動」はどのような点で有益であったか

一緒に保育に入ることによってどのような想いで子ども達を見ているかを保育者が学生に言葉で発信する機会が得られたのは良かったです。併せて子ども達も保育者以外の人と関わることが出来るので、法人目標の「人対人コミュニケーション」の実践にもつながっていると思っています。ただ、それは実習生に対しても同じであるので、「保育現場での活動」だからではなく、保育現場として話しかけやすい雰囲気、働きやすい環境を心掛けています。

(4)「保育現場での活動」のどのような点に課題を感じたか

アンケートの内容に関しては実際にやってみた学生にどう感じたのかを聞いてみると良いと思います。前提として人的環境や物的環境、空間が同じ園はないのと学生によっても子ども達や保育者を見る視点が違うので、反応が大きく違うと思っていますが、その中でも学生の意見はどうなのかを知ると改善出来ると思います。

(5) 今後、こうした企業・法人と学校が連携していくことに関して思うことは何か

学生がどう感じていたのか、何を体得したと思っているのか等、レポートやアンケート等を学校へ提出する場合は、園にも情報共有していただけると、園としても今後に生かす事が出来ると思っています。更にこの授業を経て一人でも多くの学生が保育者として働きたいと感じてもらえたら嬉しく思いますので、授業後の経過等を共有いただけると幸いです。

石堀 茂雄

社会福祉法人どろんこ会 メリーポピンズ東武練馬ルーム

12. 成果報告会報告～「保育現場での活動」で学生たちが学んだこと～

本委託事業の成果報告会では、毎年、本事業の概要および事業報告に加えて、当該年度の事業に関して、理解を深められるような内容を盛り込んできた。初年度の平成 28 年度は、連携企業・法人の委員の方にご登壇いただき、人材についてのお話をパネルディスカッション形式で伺った。2 年目である昨年度は、活動をおこなった学生と受け入れて下さった園長先生の対談形式で、学生の本音と園長先生の思いを伺った。本年度は、活動において学生が学んだことを学生自らの言葉で発表する姿を見ていただくことで、本委託事業の成果報告とした。

本章では、本年度の成果報告会の様子をふり返ることで、学生がどんな学びを「保育現場での活動」で得られたのかをご報告する。

(1) 成果報告会概要

まず、本年度は以下の通りに、成果報告会を開催した。

日時：平成 30 年 12 月 20 日（木）10：00～12：00

会場：日本児童教育専門学校 A21 教室



(2) 成果報告会のプログラム内容

①代表挨拶：小林 光俊（学校法人敬心学園 理事長・日本児童教育専門学校 校長）

本事業は、専修学校として法人・企業等との連携を深め、現場で通用する高い実践力を養うという事業を、保育に特化して進めてきている。3 カ年事業の 3 年目を迎え、お陰様でガイドラインの作成も順調に進んでいる。

企業・学校で共に学生を育てることが事業の狙いであり、特にこの 3 年間、現場の職員の方や園長先生、連携校の先生方には大変ご協力いただき、感謝申し上げます。



②来賓挨拶：宮本 二郎様（文部科学省 総合教育政策局 生涯学習推進課 専修学校教育振興室 室長補佐）

専修学校を取り巻く環境が大きく変化している。専修学校は職業教育を主として行っているが、即戦力となる人材の教育機関として、重要性が高まっている。本事業は、企業・現場と学校が連携して学生・人材を育てていく事業。3 年間取り組んでこられて、中間報告等も聞きながら徐々に成果が出てきていることを感じている。今後も専修学校の教育振興、現場での人材育成にご協力いただきたい。



③本年度の取り組み報告

事業代表およびご来賓の挨拶に続いて、本年度の取り組みについて、本校担当教員より報告を行った。

i. 本事業の取り組みについて（担当：阿久津 摂）

本事業は、入学間もない学生が保育現場に行き、子どもや保育者の姿を見たうえで徐々に関わっていく「保育現場での活動」を行うことで、学生自身が保育のやりがいや楽しさ、価値を実感することを目的に起案された。生活経験の少ない学生が増える中で、「保育実習」に対して学生が持つ不安は大きく、加えて資格取得が出来ても保育士にならない学生も増加している現状にある。



「保育現場での活動」を通して、法人・企業等と学校はともに議論しながら、「ともに学生を育てる」ために産学連携を進めてきた。本事業の3年間で得られた成果として①「現場実践基礎力」の定義の確定、②「現場実践基礎力」に基づく評価表「到達目標レベル表」の作成、③「保育現場での活動」をスムーズに実施するためのICT化である「Step by Step（現場活動ふり返りシステム）」の構築、④科目連動・科目連携を意図したカリキュラムモデル、⑤ともに育てる仕組み作り、を挙げ概略を説明した。

ii. つなぐ・つながる～現場・学生・カリキュラム～（担当：鈴木八重子）

「保育現場での活動」を実施するにあたり、以下の項目について本年度工夫して取り組んだ。

- 1 保育現場と情報共有については、時期は保育の現場活動前に、内容はできるだけ写真や題名を入れて具体的に伝える。そうすることで授業内容や専門学校側の活動の意図を保育の現場と共有し、学生が理解しやすい内容や伝え方を両者が考え学生の学びが深まる。
- 2 授業方法の工夫については、講義だけではなく、実習、実技、ロールプレイ、グループワークなどの多様性があること、見て理解しやすいように視覚化を意識することが重要。



- 3 学生の選択については、現場活動の園を専門学校側が決めるのではなく学生自身が選択できることで「自分が選んだ保育園」ということで能動的に取り組める。
- 4 連携科目表の作成については、学生が現場活動に行く日や内容を教職員が共有することで連携科目の授業内容を非常勤講師も含めてお互いに意識することにつながった。

iii.学びを触発する〈問い〉の投げかけ合い(担当：安部高太郎)

最後の報告者の安部からは「学生の学びを触発する〈問い〉の投げかけ合い」と題して、“今どきの学生”の特性を踏まえた、「保育現場での活動」のふり返りの姿が提示された。「さとり世代」とも称される“今どきの学生”の特質を、傷つきやすく、「出ない杭」でありつづけ、それでいて過剰な承認欲求を有する点に安部は見ている。これを踏まえて、「保育現場での活動」でのふり返しでは、彼ら・彼女らの性質に即しつつ、〈Yes・No〉の二択で答える具体的な質問を設定することを提案した。学生・現場活動の担当者それぞれが同様の質問に〈Yes・No〉のいずれかで答えるわけだが、答えがずれた時にこそ、ふり返りの意義が見出せるという。なぜ・どういう点でそのような判断に至ったのか、お互いに理由を明示することで、意味のあるふり返しができるという。



④わたしたちこんなこと学びました！ ～クラス全員によるポスター発表～

教員の報告に続いて、日本児童教育専門学校 総合子ども学科 1年生の 38名の学生が、「保育現場での活動」として、全5回にわたり保育所で活動を行い、学んだことについてポスター発表を行った。



今回、ポスター発表という形式で発表するのはおそらく初めての学生が多いこともあり、学生が発表のタイミングを取りやすくするために、学生の発表と質疑応答を含めて約7分という時間を設定した。全21園の発表を前半と後半に分けて、それぞれ3回ずつ発表し、来場した方々には全部で6回発表を聞いていただける形式とした。

発表の内容は、「エピソード記録」「Step by Step を使った目標の立て方とふり返し」「後輩へのメッセージ」をお題にポスターを作成し、記載した内容についての発表をおこなった。

また、学生が発表する傍らで、「現場活動ふり返しシステム“Step by Step”」を体験できる、“iPhone 実演コーナー”も設置した。こちらは“Step by Step”に興味を持ってくださった方が iPhone を手に取って、「現場活動ふり返しシステム“Step by Step”」の操作を実際に体感できるようにした。



(3) 成果報告会に対する学生の感想

成果報告会終了後に、学生に成果報告会のふり返しとしてアンケートを実施した。以下、アンケート結果をまとめた。

〈質問①〉ポスター作りにおいて、工夫したことや学んだことはどんなことですか？

工夫したこととして学生が挙げていたのは、見た目の読みやすさに関することである。(字の大きさ。きれいな字。色を使って分かりやすくする。イラストを入れる。) さらに、発表を聞いてもらうことを前提に、内容に関してもよく考えてポスターを作成した様子が見える。

学んだこととしては、園ごとにポスター作成をしたために、二人で作成することに関すること、またポスター作成を通して、活動をふり返ることで学びがあった様子である。

以下、抜粋。

- ・口頭で説明することを前提に、書く内容は簡潔にまとめて文字を大きくした。
- ・箇条書きにして話す時に内容を広げる形にしたことによってしっかり聞いてもらえるようにした。
- ・どうやったらその園に行っていない人もわかるか。
- ・改めてふり返ってもう一回行きたいと思った。
- ・二人で協力して一つのものを作り上げる苦労。
- ・しっかりと記憶しておかないとポスターを作る際に厳しい。
- ・紙に書くことで色々なことを客観的に思いだすことができた。
- ・子どもや園から学んだことをうまくまとめられて良かったと思います。



〈質問②〉学外の方に向けて発表してみて、どのように感じましたか？

学生が感じたこととしては、「発表そのものに対する感想」「発表を通して学んだこと」「聞いてくださった方の反応からの感想」の大きく3つがあった。以下、抜粋。

= 発表そのものに対する感想 =

- ・緊張した。
- ・人前に出ることに慣れない。
- ・緊張せずにできた。
- ・いきなり本番は無理だと思ったので、練習が必要だと改めて思った。
- ・3回発表したうち、1回目は緊張して紙ばかり見てしまい声も小さかったが、2回目からは慣れて少し自信をもって発表できたと思う。
- ・ただひたすらに緊張しました。見られることに慣れてないと、自分が伝えたいことが伝わっているかが不安でした。
- ・とても緊張したけど話したいことは全部話せたし、とてもいい経験になったと思う。
- ・聞く人がいない時は辛かった。



＝発表を通して学んだこと＝

- ・発表しているうちにどう話したら伝わりやすいのかも学習できて、保育以外のことも学習できた。
- ・保育園でたくさん学んだと思った。
- ・やりがいがあった。
- ・自分が感じたことなどを伝えられて良かったです。
- ・感じたことや学んだことを書いて発表することで、何回もそのことを思い出して振り返りをかねてできたので良かったです。
- ・仕組みが何もわからない方に対して説明したので伝え方を工夫したし、質問して頂いたことによって自分の理解も深めることができた
- ・練習と違って緊張感があった。分かりやすく伝える努力をすることができた。

＝聞いてくださった方の反応から＝

- ・私たちの発表に興味を持ってくれたのでとても嬉しかったです。
- ・はじめましての人ばかりだったけど、どの人も笑顔で真剣に聞いてもらえて良かった。質問も、学生とは違った観点ばかりだった。
- ・凄く緊張しました。知らない人の前に立って聞いてもらえなかったらどうしようという不安もありましたが凄く親身に聞いてもらえて嬉しかったです。
- ・全く私たちの事情を知らない人達に質問してもらうことで私たちもより深く活動のことを振り返ることができました。
- ・最後まで聞いてくださって、最後外部の方から子どもは毎日変化があり、学ぶこともたくさんあるとおっしゃってくれて何度か実習で子どもたちの変化が毎回変わっていてその通りだなと感じました。
- ・何を質問されるか分からない状態で、質問に答えるのは難しいことだなと感じました。
- ・とても緊張しましたが、熱心に私たちの話を聞いてくれたので少しでも想いが伝われば良いなと思いながら話していました。笑顔を忘れずに話す事を心掛けました。

〈質問③〉発表の時に受けた質問の中で印象に残った質問はありましたか？また、質問を通して気づいたことはありましたか？

今回の成果報告会では、学生が学外の方に発表し且つ質問を受けることで、学生の学びが深まる機会になることを期待していた。以下、抜粋。

- ・子どもがそれでは納得しなかったらどうしますか？ということで、他にも考えられるように様々なパターンが浮かぶ先生になりたいとおもった。
- ・本を譲った子に対し、「褒めてあげましたか？」という質問を受けたのが印象的でした。褒め方にもたくさん種類があると気付かされました。
- ・Step by Step の振り返りへの質問が印象に残ってます。その日その日で計画を立てられるのがとてもスムーズに行えるのだなと気づけました。
- ・実習時間と実習日時を親身に聞いてくれた質問が印象に残りました。確かに短いと感じる人と長いと感じる人の違いを知りました。
- ・自分の体験を話す人が多かった。発表を聞かないで質問攻めされた時はとにかく辛かった。優しい人が多くてよかった。

- ・質問の時間の際、子どもと大人の目線の違いについて教えていただきました。咄嗟に回答を考えなければいけないため大変でした。
- ・保育園で大変だったことは何ですかと聞かれたことに印象残りました。大変だったことを振り返ってみて絵本で子どもたちから囲まれて色んな本読んで欲しいって言われたことって答えたら、外部の人から子どもは順番とかで読んであげたり今日は 2 冊までって決めることが大事と言われてなるほどと気づくことができました。
- ・1 歳児が緊張してしまった時に、緊張が取れるようにどんな対応をしましたか?という質問が印象に残りました。後から考えると色々と答えられることが出てくるけど、その時は何て答えたか覚えてません…。

〈質問④〉自分の園以外の発表を聞いて、どんなことを感じましたか？

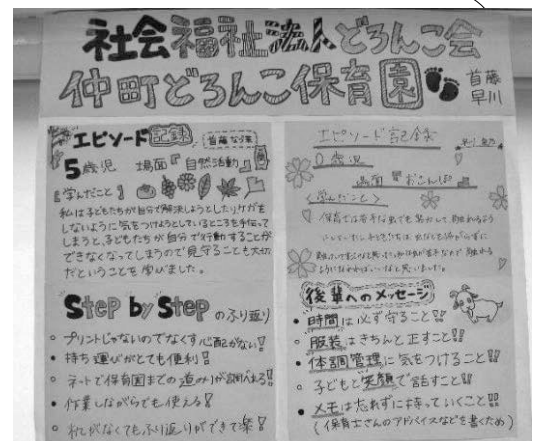
学生同士で発表を聞き合うことができるよう、学生の発表を前半・後半に分けた。お互いに聞き合うことで、気づきもあった様子である。大きくは「園や発表の多様性」「発表自体に関すること（工夫・改善点）」であった。また、園の特色などが多様の中でも、共通する部分について言及する学生もいた。以下、抜粋。

＝園や発表の多様性＝

- ・特色がやっぱり違うなと思った。同じ系列でも、活動が違ったりするので今度詳しく調べてみたい。読み聞かせ私もしたかった…。
- ・エピソードはやっぱり全然違う内容だなとおもいました。それぞれ日常で色々な問題や出来事が起きるのでその都度いい考えができるようになりたいとおもいました。
- ・環境が違うと、得られる学びも様々あるのだと改めて感じた。
- ・後輩へのメッセージや、Step by Step での振り返りをして思ったことは、みんなほとんど同じだった。
- ・前期でどろんこ会の保育園、後期でベネッセスタイルケアの保育園に行ったから、発表はチェリッシュの保育園を見た。方針は様々でも、どの園も子どもの保育を工夫して毎日行っていることは共通しているなと感じた。

＝発表自体に関すること（工夫・改善点）＝

- ・発表の紙に可愛い絵が書いてあったりして見やすく、惹かれやすいと思いました。
- ・事前に台本などを作って、本日にスムーズに行えるようにしてました。また、声がハッキリとしていたのでとてもよかったと思いました。
- ・みんな凄くクオリティーの高いポスターを作っていて焦りを感じた。声が小さい人がいたのでそこは直した方が良かったと思った。
- ・ポスターをカラフルでとても見やすいように工夫して、発表でポスターに書いてないことも詳しく伝えていてよかった。
- ・原稿を見ないで考えて発表していたところがありました。聞き手の方を向いて話していたので聞き取りやすかったです。



〈質問⑤〉保育現場に行ってみて、保育士の仕事の魅力はどんなところだと感じましたか？

最後に、学生たちが現場に触れてみて、保育士の仕事に対する魅力をどんなふうと感じたのかを聞いた。大変な仕事だという認識をする中でも、それでもなお、魅力として感じる部分があったことがうかがえる。以下、抜粋。

- ・保育園の保育士の方はみんなとても優しく、まだ何も出来ない自分たちに対しても色々優しく教えてくれました。手遊びの時などどうしたら子どもたちの興味を引けるかを色々工夫していて凄かったです。
- ・子どもの成長をすぐ近くで直に感じることができること。自分も成長できる気がした。
- ・かわいいとかだけではなくそのかわいい子たちに自分はなにを伝えていきたいかそれを持ってる先生は素敵だし魅力的だとおもいました。
- ・1人で10人を見ているクラスがあった。本当に全員見ているのか不思議に思っていたが、しっかり見ていた。その事を保育者から聞いたら必ず部屋の端っこにいて、周りを見ていると説明してくれた。早く保育士になりたいと思った。
- ・子どもと接する楽しさがさらにわかって魅力を感じました。子どもの、気持ちを読み取ることの難しさもあったけど保育士の方をみてかっこいいと思った
- ・保育士は大変な仕事だけど、園で見学をした時に子どもと関わる時の楽しさがわかった。関わる際に大切なこともわかった。
- ・子どもたちの笑顔を見ることが出来る場所。〇〇先生!と、信頼できる大人として保育士を思ってくれるのを感じることが出来る事。

(4) 成果報告会にご来場いただいた方のご感想

ご来場いただいた方からも、アンケート形式で感想を伺った。

①本事業の取り組みについて

ご興味を持たれたところについては、前半の事業報告で取り上げた、本事業の特色である「現場活動ふり返しシステム“Step by Step”」「到達目標レベル表」「産学連携」「科目連携・連動による教育効果」を挙げてくださる方がいた。また、「今後の展開について(保育実習、また保育士としての活躍への期待)」と回答してくださる方もいた。

②学生の発表を聞いての感想

学生の姿を直接ご覧いただいた、来場して下さった方の感想としては、「今現在の学生の姿」「未来の学生の姿」「現場を体験することの学生への影響」が挙げられた。以下、抜粋。

- ・学びの途中の学生さんたちの、今現在の素直な思いや考えをお聞きする事ができて良かったと感じています。
- ・前期～後期への大きな成長が感じられました。「保育」だけでなく、発表時にマスクを外す、などの姿もほほえましい。
- ・とても新鮮な感覚で、こども、保育者のことを見ていることがわかりました。
- ・お話を伺った学生のイメージよりとても前向きで良かったです。



- ・場を作った時の学生の力の発揮は素晴らしいと思いました。現場と連携しながら、自ら行動する力が伸ばせていけたらと感じます。
- ・様々な気づきがあり素敵な発表でした。これを今後の実習に活かしてほしいです。
- ・保育園によっても方針や方法が違う中、はじめて現場に出たところの園の方針や方法に共感している所、素直に受け入れている姿を見ることができ、現場の責任の大切さを実感した。

③成果報告会全体についての感想

- ・現場と学校の連携は素晴らしいです。
- ・学生全員のお話を伺いたかったです。
- ・3年後が楽しみです。
- ・貴重なご報告の場をありがとうございました。3ヵ年の最後とのことでしたが、学生や現場によるこの活動が継続されることを願っています。
- ・保育士になることが目的になってしまっている学生が多い中、本取り組みにより、「なる目的」や「なった後の目標」を自分で語れる学生が増えると感じました。
- ・実習生、若い職員を受け入れる際の参考にしたい。
- ・本事業についてポイントをおさえ、視覚的又学生さんとのやりとりという実践的な方法でお伝えいただき、たいへん参考になりました。
- ・個々の資質に頼るのではなく、学びの機会に、具体的にどのような事を身につけていけるようにするのかについて、大変良く検討されていると感じました。様々なご苦勞がおありだったと思いますが、学校での学びと現場での学びをくり返し振り返って積み重ねることに、大きな意義があることを、学生さんの姿から感じることができました。
- ・学生さん達に少し「社会人教育（礼儀、規律、目配り・・・）」がほしいかも？
- ・発表する機会なので、服装にも気を配ったほうが良いかと思います。（室内でコートを着用しているのが気になりました）

大変ありがたいことに、本取り組みの継続を期待してくださる声が多かった。学生の服装、態度に対するご指摘もあったが、今後の参考とさせていただきたい。

芝井 華子

日本児童教育専門学校 事務局

13. おわりに

(1) まとめ

本報告書は、多様な立場の人がそれぞれの観点で、デュアル教育がいかに実現可能か、保育者養成に対してデュアル教育がいかなる意味を持つのか、について向き合ったものである。

養成施設としての学校は、デュアル教育という新しい取り組みに、文字通り格闘した日々を送った。単位実習としての保育実習ではない、保育現場を知る活動として「保育現場での活動」を位置づけつつ、その賃金報酬の発生に関しても可能性を探っている。

保育現場も同様の格闘が続いていた。それこそ、保育の「ホ」の字も知らないような、或る種の素人を、子どものいのちを預かる保育現場に入れるわけであるから、不安に思い、苦慮された点も多々あろう。

学生もそうである。学校に入ったばかりで、保育現場に行ってみるというのは、必ずしも期待ばかりではなく、自分の無力さを感じるのではないか、何か問題を起こしてしまったらどうしようという不安にも曝される経験だったことであろう。

三者三様に格闘した、この日々の中で、それでも三者とも得るものがあつたはずである。新しいことに挑戦するというのは、思いもよらない“失敗”がつきものである。しかし、我々がした“失敗”はきっと誰かが前に進むための跳躍台になる。

(2) 今後の課題と展望

本報告書の随所で言及されていたように、賃金報酬の可能性についてはまだまだ検討の余地がある。加えて、到達目標レベル表やシステムの改訂は今後も必要なことであると思われる。実情に即して、よりユーザーフレンドリーな仕組みを構築していかなければならない。

安部 高太朗

日本児童教育専門学校 専任講師

平成 30 年度 文部科学省委託事業
専修学校による地域産業中核的人材養成事業

現場実践基礎力を有した保育士養成のための
「保育現場での活動」のガイドライン作成事業
成果報告書

学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校（事業責任者 小林 光俊）

発行年月日 平成 31 年 3 月 1 日

発 行 小林 光俊

編 集 阿久津 摂

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-32-15

学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校

電話 03-3207-5311 FAX 03-3205-1785